女學雜誌

明治二十九年

七月刊行

第四百貳拾四號目次

明治女學校新築費募集

第二回報告

金壹百參拾圓也	河內國若江郡玉川村	藤戶貞一郎殿
金拾八圓也	同	藤戶みす子殿
金貳拾參圓也	播州須磨	池田みつ子殿
金拾八圓也	東京紀尾井町	齋藤宇一郎殿
金拾八圓也	同	齋藤峯子殿
金拾八圓也	東京本鄕新花町	本田增二郎殿
金拾八圓也	同飯田町五丁目	芳賀廣三殿
金卅六圓也	京都祇園前	矢島千代子殿
金廿參圓卅二錢八厘	筑後三池義捐音樂會	有志諸君
金參圓也	筑後三池	今村高殿
金貳圓也	同	川野修藏殿
金貳圓也	同	野口忠太郎殿
金貳圓也	同	清水岩藏殿
金貳圓也	同	岩瀨延二郎殿
金貳圓也	同	松原堯殿
金貳圓也	同	野田卯太郎殿
金貳圓也	同	富川某殿
金貳圓也	同	森時三郎殿
金貳圓也	同	島田純一殿
金貳圓也	同	林英吉殿
金貳圓也	同	三井得悅殿
金壹圓六十七錢二厘也	同	宇佐穩來彥殿
金拾八圓也	東京富士見町	河本かめ子殿
同	大坂	伊藤柳子殿
同	宮城縣遠田郡南鄕村	久保愿吾殿
同	東京	串田ふみ子殿
同	上野伊勢崎	久保とみ子殿
同	東京	落合あい子殿
同	名古屋	內田よし子殿
同	東京	千住よね子殿
同	同	千住いは子殿
同	播州龍野	富井定助殿
同	在台灣	山田新助殿
金拾圓八拾錢也	東京	小島清子殿
同	西京	古在豐子殿
同	東京秀英舍	高田乙三殿
同	東京警醒社	羽田浪之貂殿
同	東京救世軍	山室軍兵殿
金拾八圓五十錢也	東京鐘ヶ淵紡績會社工女夜學校生徒	二百二十六名殿
金三圓也	同前會社	若梅錫子殿
金三圓也	橫濱南仲通三丁目	依田ます子殿
金二圓七十二錢也	熊本女學校	有志生徒御中
金一圓也	山口光城女學校	有志生徒御中
金拾一圓也	在大坂地久節祝賀會基督敎徒婦人會御中	

金三圓也	河内北河内郡甲可村	細谷吉三郎母殿
金三圓也	橫濱相生町一丁目	里吉きん子殿
金一圓也	筑後三池郡	渡邊純一殿
金五十錢也	函館靖和女學校	小川かね子殿
金廿五錢也	同	平澤とし子殿
金廿五錢也	同	神山みよしの殿
金一圓也	京都四條教會	中村伊津吉殿
金一圓五十錢也	仙台	美以教會御中
金一圓三十錢也	同	無名氏殿
金一圓也	後志國瀬棚郡利別	丸山まつ子殿
金一圓也	函館遺愛女學校	瀬川みよの殿
金三圓也	備中高梁順正女學校	門田榮子殿
金三圓也	甲府花園町	林友惠子殿
金二圓也	台灣民政廳	末次政二郎殿
金一圓也	熊本縣山鹿町	江上勝子殿
金三圓也	相州厚木町	高部竹子殿
金五圓也	東京一番町	武林盛一殿
金二圓也	東京正路喜社	池上正路殿
金三圓也	在米澤	無名氏殿
金二圓也	東京	三輪田眞砂子殿
金七十錢也	伊豫長濱	婦人會御中
金一圓也	東京上富坂町	林正子殿
金三圓也	仙台宮城女學校	淺井柞子殿
金九十錢也	赤間關日本基督教會	有志者御中

女學雜誌

第四百貳拾四號

明治二十九年七月二十五日發兌

社説

時弊を言ふの空論

人心一と度び萎靡すれば、不平内に鬱し、元氣外に屈す。此時に當つては、憒々たる空論を聞くのみ。吾人、玆に其の情義理想に關はるもの一二を指摘し、少しく其の失當を辯ぜんとす。

一　俗を擯ぞくるの不當

曰く、凡俗。曰く、俗論と、俗を卑しむの語到る處に聞ゆ。就中、之を教育者たり宗教家たる人士に於て聞に至つては、豈に痛歎の事にあらずや。吾人竊かに先哲古聖の言行に學ぶに、未だ甞て其の俗人を輕侮したる語氣あるを見ず、偶たま之ある時や、即はち愛憐撫恤の調のみ。古人等と道俗の二つを言ひ、道士道人に對して假りに俗人を分つの旨意、豈に安くんぞ之を蔑視せんとするが爲ならんや。既に超然として利害の外に卓出し、渾然一和して俯して世表衆生の煩惱に顧みたらんものは、何如にもして之が救濟慰魂の事業に身を投ぜんとすらん。此時に當つて、豈に俗を卑しむの餘暇あらんや。抑そも、一世の事業なるものは、一代の凡俗の爲にするのみ、若し賢者道人の爲めにすと言はば、遂に其の効なきを見ん。鐵道電機、何者の爲ぞ、學教美術、何人の爲ぞ、政府外交、何輩の爲ぞ。若し夫れ凡俗の爲めにすると輕んずとせば、人世の事業過半は益なきのみ、士人果た何の用ありてか營々せんや。試みに、先哲古聖の大慈大悲を觀よ、身は是れ松風蘿月の伴、雲霞を吸ひ、神仙に交はり、脱然として榮辱なく、自適として眞樂あり、抑そも世上何の誘引するものありてか降臨すと思惟する。他なし、衆生を愛し、凡俗を念へばなり。故に身を凡俗の姿にやつして、衆生一切の禍福に混じ、哲智を抑へて暫らく平凡の世情に則とり、愚かなる言語を使ひて絶えて麗はしき論議を用ゐず。要とする所は、其の魂

を慰めて、其不吉を救はんとするにある耳。如此き聖賢、身を下して、俗中の俗に沒し、安んじて其同情同感に死活せられたるの美事を想へば、吾黨小子、夫れ何の誇る所かありて敢て他を非議するとを爲さん。冀ふらくは、温乎たる其の慈愛に倣らひ、切實なる其の憂慮に則とり、かの滔々たる凡俗の爲に鞠躬盡力するを以て光榮となさん哉。警告す、世上の學者、俗を卑しむは是れ大俗に非ずや。古來俗を賤しむとを爲して而して能く高ふせしものは、未曾て有らざりしにはあらずや。

二　人なきを歎ずるの不當

方今の輿論は、百弊の出處を人物なきに歸し、万機の善動を人物出づるに頼み、只管ら、人を待ちて其他を顧みざるにあり。嗚呼是れ人物を重んずるの謂ひならんや。看よ如此き輿論あるの日、遂に能く一世仰望するの人物を表出せしめたるとは未曾て有ざるべし。夫れ、人を待つは、活氣生命を待つなり。活氣生命なきの日、人々自から其の空なるとを自覺して則はち活氣生命を望むの語を發す。正に是れ人物を待つの輿論なり。但だ夫れ人物を待つ、故に人物を評隲すると彌よ

精やかにして、人物を信ぜざると彌よ甚だし。惟ふに、如此き時代に於ける一世の雄たるものは、遂に輿論の當贊を禁むると能はざる也。幕府瓦解に近づくの頃、均しく亦た如此き評論あり、一世皆な擧賢用才を議して而して能く賢才に任じたるとなし。人物論隆んなるの世や、常に則ち如此き也。當年の横井小楠先生論して曰く、諸君人物を重んぜば何んぞ人物なきを憂ひん、五人に優りたるものあらば伍長とせよ、十人に過ぎたるものあらば、十長とせよ、斯の如くして任用し去らば、世上何の時か人物なきを歎ぜんと。夫れ、人物なきを歎ずるの聲は多くは人物を毀つの聲なり。圓滿完全の品格あらずんば即はち人なしと言ふ乎、左らば先づ此品格を識認す可き圓滿なる輿衆なかる可らず。是れ遂に何の時代にか望むとを得可き。夫れ、達人之を用ふれば、死者も尙ほ活くべし、世上、人なきに非ず、人を用ふるの人なき也。人を用ふるの人なきにあらず、用ひんとするを妨たぐるもの丶多きの耳。左らば、徒らに人なきとを歎ずるものは、須からく先づ自己の爲に歎ずべし。自己の未だ人を活かすとを得ざるとを知り得べければ也。嗚呼、囂々たる人物を待つの聲は憒々とし

て人物を斥ぞくるの聲なり、吾人何んぞ其の慨歎に贊同するとを得んや。

三　傍觀者公平を誇るの不當

今や公評を當路の人に求むべからず、やゝ公評らしき批判は僅かに之を傍觀者に於て聞くべきが如し。然れども、傍觀者に公平の評ありとも、未だ必らずしも其人を公平なりとす可らず。これ其人の公平なるが故にあらず、只だ無責任にして未だ其の感情を傷害し居らざるが故のみ。一と度び路に當つて同一の利害を負はゞ、感情忽まち歪み、批判直ちに曲り、則はち公平を維持せんと頗ぶる難しとす。此を以て傍觀者の公平は事實に於て左したる効力あるものに非ず。何んとなれば、其の人品の伴隨せざる批評は、遂に能く當路者をして反省せしむるの勢力あらざれば也。彼既に路に當らず、故に當局の弊を自から矯正すると能はず、而して亦た當路者をして反省せしむべきの効力なしとせば、偶ま無責任の地に立つが爲めに發し得たる血なく涙なきの公評ありと云ふと雖ども、夫れ果た何の實益かある。寧ろ反つて當路の人士をして反動せしめ、更に幾層の僻み根性を挑撥せしめんのみ。試みに見よ、政治界に立てる人士が文學を評して稍や公平らしく論じ得たりとするも、彼が政治界に立てる地歩の宛然其の文學者と同然ならば、評論の効力何處にかある。又、教育者が人を論じ、宗教家が時勢を慨するも同じく然り。たとひ何等高潔の批判を爲し得たりとするも、彼等士人が其の當局に立てるの地歩に於て先づ公平を得るに非ざれば、傍觀評他の雅量の如何に優し氣なりとも、未だ以て欽するに足らず。笑ふべきは、士人互ひに論ずるの筆法なり、元來、事實に於て他を批判するの權力なきもの即ち尤とも多く他を批判し、自己の弱點を自覺する者即ち之を其長所なりと誤認するや、滔々皆是れ也。此故に、人々先づ局に當つて情義の難題を實際に經驗し、躬行自から覺つて公大の品德を養ふ底の苦練あるものにあらずんば、未だ容易く評論の任に當る可らず。血涙の同情なくして、難きを人に責め、高大なる義憤あるに非ずして輕々しく他を罵しるが如きは、神聖なる筆權を握るものの斷じて爲す可らざる所とす。惟んみるに、近來の患ひは、公評なきの憂ひにあらずして、公評多きに過るの憂ひ也。公評の多きに過るは、無責任者の多きに因る。人もし自から省りみ

て仔細に人情の弱點に悟る所あらば、豈に安くんぞ容易に公平の評論を吐露するとを得べけんや。公平の評論とは他なし、公平に情義を斟酌したるの評論これ也。單に紙上無責任の公平論は、唯理學者の解剖の如し、事實に際して効力あるものにあらず。嗚呼、公平なる哉、如何に多くの冷血無情が爾の名に於て僞つて高ぶるとをなすぞ。

四　空論を補ふの空論

空論の遂に空に歸するは自然の數のみ亦何んぞ奇しまん、義當に放任すべく、慨して之を論ずるの價値なきに似たり。而も月刊の雜誌、年月の通勢を觀察し、世上の小波瀾も些さか思潮を動かすに足ると思惟せざるを得ず。即ち此の小論ある所以也。但だ夫れ人心感應の徴妙なる、社會自衞の巧慧なる、文士暴りに無用の慷慨を爲すを要せず、着々として其眞を吸ひ其正を呑むに進んで、十年の因果遂に穩當ならずと云ふとなし。左れは、時弊を救はんとする者は、先づ質實なる見地に起つて、堅固なる素養を旨とし、自他共もに確乎たる根柢の改善を圖るを以て第一とすべし。如此くして初めて空論を補ふとを得ん歟、空論を補はんとするの空論も亦益なき耳。

四

女學

詩的手藝

女子教育に於ける一秘訣

古人、「大功は細瑾を顧みず」の説あり。細瑾を可なりとするにあらねど、心頭先づ大功を熱望し、放膽有爲、斷然として小節に區々すべからずと言ふの主旨なり。青年男子の敎育に於ては、此邊の取扱ひを手ごころにするとを忘る可らざるなり。

之れに反し女子敎育に於ける一種の秘訣として、「詩的手藝」とも稱すべき訓練の法あり。此は必らずしも、女子にのみ限るものにはあらで、男子にも所詮到底は利用せざる可らざるとなれど、其の必要の度合、女學に於けるが如くならず。故に之を女子敎育の爲めの専用として、試ろみに左に解説せん歟。

普通敎育の程度に際して、適宜の敎育を受けつゝある穩健の

女生徒を見よ。眞率無邪氣、淡泊ノンビリとして、譬へば、春天の花、慈日温雨の下に何の故障もなく優然として開き咲はんとするが如し。眞に美にあらずや。然るに、此の美なる女學生が卒業後他に嫁し、ちと早過るほどに一家の主婦となり、僅々一二年の星霜を經たる計りにて、或る時、學校などへ緑見をかき抱きて來訪する風采を觀よ。顔色の艶既に失せ、姿勢自から究屈にして、一見、十數年前の故人の如し。應接は如何にも尤ともらしく、世辭も中々巧みなれども、言ふ所を聞けば只管ら人情の險しさに喫驚して、世は中々學校の窓より窺きたる如きものにあらずと悟り、忽然、世帶じみて純乎たる世話女房となりたる也。世話女房は固より可し、然し乍ら熟々其元氣精神を察すれば、既に早や女房の時代を經過して婆となりたる也。

一概に婆氣を罵しるにあらねど、年少有爲の女丈夫氣質頓に失せ、家庭庖厨の改革すら未だ成らずして、進歩的精神の忽ち消散するは歎かわしきとにあらずや。凡そ女子敎育者、其卒業生を愛護するの情念に於て、多少此邊の經驗感慨に遭會せしとの全たくなきものはあらじ。

是れ實に卒業女生が餘り早く一家の主婦となるの弊因にも根づくとなれど、此の早く婚するの風俗が改まらぬうちは、單に此の弊因を責むるとも甲斐なし。更に他の一大弊因となるものは、即はち普通女子敎育の程度に於て、一の秘訣を施行せざるの致す所ろ、他なし本篇主眼とする『詩的手藝』の訓練なきに因る也。

『詩的手藝』とは何ぞ。詩的趣味と、器械的手藝とを融和調練し、煩瑣些細の小さき手わざを、高尚優美の詩想を以て從事し得るやう習ひ慣れしむるの鍛錬是なり。例せば、手に雑巾を縫ひ乍ら和歌を詠じ、算盤を彈き乍ら美術を品評するの姿にて、所謂ゆる俗務を俗務とせず、風雅の心を以て俗務を執り、優然自適、綽々切迫せずして變化もなき煩はしき細事を面白く處辨する底の覺悟を言ふ也。

此種の覺悟は男子にも等しく入用なると論ずる迄もなけれど、取分きて切要なるは即はち女子に於てとなす。女子一生の職分は、概して精やかなる、煩はしき器械的の仕事を割合ひに多く擔任するにあり。故に詩的高尚の趣味などありて能く之と伴隨し、否らずば無意義なる純乎たる器械的にのみ流

れんとす可き弊害を矯めて、「歌ひつつ働らく」てふ面白味を自得せしむるヿ就中切要なり、もし能く此好習慣を自得せば、他日家政を主どりて隨分の貧苦にあひ、なれぬ不自由に出で會ひて營々寸暇なき迄に働らき通す身分となるとも、其働らきの中に餘裕閑雅を生じて、自から切迫の氣味を減じ、閑雅は雅趣を生じ、餘裕は德性を養なひて、斯る多忙繁劇の裏に沒したる身分に珍らしきほどの品格を蓄積するヿを得べし。婦人もし此脈絡に觸れて、かゝる系統の進歩を爲すに及べば、煩劇は彌よ其才を老ならしめ、貧苦も反つて其德を堅くして、あつぱれ床しき上品なる女性となり了るべし。彼の教育ある女學生が、一歳の苦勞にあひて乍まち萎縮し、春花早く凋みて時ならぬ婆風を吹かす所以のものは、必竟、此の一道の修練に逢着せずして、未だ詩的手藝の習慣に熟せざる中に、室の花俄然浮世の風に曝らされて喫驚たゞならず、倉惶其の瓣を閉さんとして所謂る世帶じみたる因循氣にのみ引込むヿを爲したるが爲めなるべし。

然るに、詩的手藝の好習慣に熟せしむるの方や、之を自得せしめて初めて益あるべし、說法して能く奏効すべきにあらねば、女學校教育の平時に於て、不知不識の間だに此の習慣に感染せしむるよう、預てより校内の薰化なかる可らず。此の薰化を隆んにするの方他にあらず、校長役員、率先して詩的手藝の摸範を實際に顯示するヿを怠たらず、綿密精細なる注意を以て、煩瑣末節の事務に耐え、勤儉にして錢勘定に精はしく、よく物を節して何品をも忽諸にせざる等の覺悟を一方に勵行すると同時に、他方に、上品にして雅趣なる詩的品格を發揮して、苟且にも下品ならず、錢を扱ひても自から殿樣の如く、物品を惜みても何となく詩的意味あるかの如き光景を示し得るほどに、生平根本の修養なかる可らず。凡そ、品格は多年の縕積によつて自然に發揮するものなれば、上述する如き好模範を顯示せんとには、即はち亦多年の修養なかる可らざる筈なり。既に多年の修養を自然に發揮して、亦た多年の間だ、不知不識の際に其女生を薰化し、之を無意識に自得せしめて以て他日の活用に供ふべし。

左れば、普通女學の教育に、詩的手藝の鍛練と稱すべき一秘訣の存するヿは、當路の人の決して忽諸に附す可らざるもの也。而して、此秘訣を實行して、他日の活用に供ふるの教化

は、先以て當路者其人に於て、詩的手藝の好模範を實際に顯示するにありと知るべし。

福翁の婚姻論

福翁が常識的實踐哲學講話なる「福翁百話」今や婚姻論に入れり、福翁「婦人の再婚」を論して曰く

忠臣二君に仕へず、貞女二夫に見えずとは、一身にして同時に二國の君に奉公する勿れ、一婦にして同時に二人の夫を親しむ勿れとの義に解釋して可なり、斯く解釋すれば毫も人事に妨げなくして、至極尊き教なるに、男尊女卑の習慣は此教を極端までも擴張して女子の自由を奪却し、恰も之をして窒塞せしむるに至りしこそ殘刻なれ、吳々も感服せざる所なり。

といひ、夫死して後其妻再嫁するは毫も咎めあることなしとし、またいへり。曰く

結婚は生涯の一大事にして既に結びたる上は、死に至るまで解くべからず。夫婦一身同體にして、小心翼々他に願る所ある可からずと雖も、唯人身の約束に免かるべからざる死別の一段に至りては覺悟を改めて、第二生の境界に入り、神氣爽然として寸點の蹈りを見ず……即ち是れ大自在の安心法なり、

其又「早婚必ずしも害あるに非ず」を論じては

早婚に害あれば晩婚にも亦害あり……男女室に居るは人生無上の幸福快樂なれば、此快樂に刺衝せられて、勉强するの意味なきに非らず……又早く子を產めば家計に困ると雖も成長の後には親子共に力を合せて働くの利益は甚だ大なり、

また早婚の子は虚弱なりとの說は容易に受取り難しとて、古來英雄が年少の父母によりて生み出されたる實例を引證し、また諭吉氏の母堂が其母、十五歲の子にして、而も頗る强健なるよしをいひ、早婚の子の虚弱なるは他に理由のあるとをして

早婚に多小の不利ありとするも、其不利は僅々のみ。

と斷ず。吾人は常識が一方面のみを觀察するの謬謬に陷りたる、福翁の早婚可許說に贊同する能はず。

女子の職業

例によりて報知新聞所載の報導を摘錄せん。

○メリヤスの內職

メリヤスの內職には一臺の平口器械あれば三人位は樂に生活し得べしと此器械の代價は舶來なれば二百圓ばかりなれども近頃は大坂にて製造せられたるものにて金五十圓位のものもありと云ふ

メリヤスの內職中にて器械も輕便に出來且つ人力を多く要せざるものは靴下織なり。左れば下谷本郷あたりのみにても身分ある人の家族にて此內職をなすもの千軒以上ありと器械は改良靴下織と稱するものにて市中の器械販賣店へ注文すれば何時にても手に入るべし代價は三四十圓なれども附屬器械を要するが故に先づ五十圓は懸るべし二三ヶ月間熟練者に就て見習をなせば差支なきに至らん此の仕事は一人にては捗取らず故に家族なき人は糸取及び織方の手傳を雇はざる可からず此等の手傳あれば一臺の器械にて平均二ダース位を織上げ得べし一ダースの賃錢

は二十五錢より三十錢位迄なれば一日の收得五六十錢となるべく其内手傳に十錢宛支拂ふとするも三四十錢の收利あるべし

東京にて蒸氣力にてメリヤス器械を運轉し居れるものは、日本メリヤス會社と郷川メリヤス工場の二箇所なれども、人力による器械を所有する小工場は市中を通じ四十箇所あり、それ〳〵多くの工女を使用し居れりとぞ。

○毛糸編物の内職

東京市中にて毛糸專門の問屋と稱するものなく何れもメリヤスの問屋を兼れ居れるが其中にて重に毛糸を取扱ふ店は日本橋區葺屋町の石井商店同區田所町の金子商店等にて尚ほ横山町邊に二三軒の問屋ありと云へり此等の問屋は直接原料を内職者に渡さず矢張り下職なる者ありて問屋の注文を受負ひ其者より更らに内職者の手に配付するなり目下市中にて毛糸編物の内職をなすものは石井商店の分のみにても五百餘軒ありと云へば其他問屋の分を尋ぬれば三四千軒にも上るべし毛糸編物の賃金は一ダース幾許にて計算するものと百日幾許にて計算するものとあり初心の者は兎角原料を濫費する虞れある故ダース計算を用ひ熟練なるものは細工に念を入るゝ故目方計算を用ゆるなりと靴下は一ダース七八錢より十錢位にて手袋は一ダース八九錢なり其他頭巾襟掛等は其細工に依りて賃金の高下あれども其最も高きものは一ダース二圓位のものなりと靴下手袋類は一日大抵一ダース位を仕上げ得れども上等の仕事は極めて熟練なるものにて一ダースに四日位を費やすべしと云ふ然るに此糸は冬向きのものなれば、夏季は仕事も手隙きなれば從て多くこの場合にては賃金も中額位いなるよし。

毛糸細工は一種の技藝なれば之れを修得せんには少くとも二三ヶ月間を費さゞる可からず尚ほ其技に達せんには四五年の星霜を要すべし今日上等の細工をなし一ダース二圓位の賃錢を得るものは皆四五年を毛糸のみに送りたる老功者なりと云へり。

○ハンケチ刺繡の内職

本邦にて絹製のハンケチを創めたる地は横濱にして其事業の盛なる亦此地に越えたるなし目下横濱に於けるハンケチの問屋は二十餘軒あり而してハンケチ營業者は一個の組合を組織し其組合員は二百餘名の多きに上りぬ。東京にて問屋と稱すべきものは菅川、堀越の兩商店に過ぎず而して其下職者は菅川商店に二十餘軒、堀越商店に十餘軒あり。其他全國に於て此事業に營み居れるものなし。横濱は土地狹隘なるを以て製品は之れを附近の田舍に持出して製造せしめけるが就中小田原地方の如きは其製品を受負ふもの多く小田原市中は殆ど戸毎に此内職を營み居れりと言ふも不可なき盛況なりと。ハンケチ製造の盛んなる時季は三月頃より十月頃迄にて其の最も盛んなる時には一日の製造高殆ど十万枚に及びけるが其賦合は東京三万枚、横濱五万枚、小田原一万枚位なりと。ハンケチの輸出は年々益々增加の方にて昨年の如きは百万ダース以上を輸出したるが輸出羽二重の三分迄は此ハンケチに依りて占められたりといふ。又其得意先は米國第一にて、倫敦、里昂之れに次ぐとぞ。

ハンケチ刺繡賃錢は、ハンケチに附縁、打返しの二種あり、また長短廣狹上下の差別あるより、其賃錢の如きも區々にして定まらざれども先づ大概は一枚一錢五厘より三錢五厘位なり尤も附縁は少しく面倒なれば二三厘方高賃なりと初心の人は一日普通の品にて五枚(此賃銀は七八錢なり)位を仕上れども熟練なるものは上等の品にて五枚位を仕上げ得べし一日に上等の品を五枚仕上ぐるとせば先づ十七八錢の賃錢を得るなり。

早稻田文學許して曰く

『女學雜誌』は必ずしも婦人、家庭をのみ讀者とせず言はゞ社會の礎たる家庭、婦人其他の諸方面に社會的觀察を下し、之を世間大方に報じて、改善の道を講ぜんとするものといふべし。されば此誌のみは、前諸種の雜誌(諸種の婦人雜誌をいへり)と自ら面目を殊にせり。

子を思ふ道はいかなる道なれば、
しるよりやがてふみまよふらん

茶樹

觀潮

（二十三）　都會問題

都會の問題、今や漸く世人の耳目を惹かんとする傾向あり、尤も一部面の社會的觀察を爲したる者は之れありと雖も、未た政治、經濟、宗教、道德、氣風、教育等の諸面より推究して、果して如何になるべきや、如何になさゞるべからざるやを論じたるものなし、余輩亦多少の注意する所ありしも、未だ之を論ずるの機なく、僅かに「東都を觀る」の一篇を『宗教』に出しつゝあり、而もなほ序言に止まる、五月以來の『國民の友』紙上二三之に及びしものありしが、他には多く之を見ず　然とも時勢は、必ずや喧しく之を議するに至しめん。新渡邊稻造氏は『國民の友』に於て、本邦將來の趨勢を案じて謂らく、

（座右新渡邊氏の寄書を載せたる國民の友を欠く、依て「早稻田文學」の抄錄に據る）

●本邦將來之趨勢

（一）教育上の變遷　靑年は郷關に雌伏するを好まず

（二）交通機關の變遷　都府より邊陬に移轉する者なきに非るも多くは邊陬より都府に來る、

（三）都府集合の政策　學校、街燈、排汚、水道、道路の建設成りて生計に便を與ふるは招來の一方便さなる、

（四）政治思想の發達　政客は功名心に驅られて大都に出でんさす、

（五）工業商業の發達　賃金を騰貴せしめ且つ都市にのみ勃興する時は是亦人口吸收の弊を生せん、

（六）徵兵制度　兵役に就く者十中八九は邊陬の徵發に係る割合さなり田園は老弱のみを殘すと今日よりも甚しからん、

（七）地方の財制　農工銀行の設立は土地兼併の弊を防くも增稅の義務は地主に於て免るべからず、於是益都府に移住するもの增加せん、

而して此等の事情は農民をして漸次商工に轉ぜしめ、都市榮えて田舍衰へんとすと論ぜり、右は抄錄に據りたるを以て今茲に評論することをせず、想ふに以上七個の事情の如きは、都會問題を生せしむるものたるに相違なし、曩に米人ストロングの「ニユー、エラ」を讀む、中に地方問題と都會問題との二篇あり、後者に於て氏は、

（一）都會の組成、（二）都會の圍繞、（三）都會の孤立

（四）都會の急劇の成長、（五）家庭の缺無、

の五條に就て論じたるを以て視る、余輩久しく東都に在りて東都を視察するもの、米國とは大に差別する所あるを認むるも、亦相似たるものあるを知れり、彼國の宗教家、社會改良

家の斯問題に注目するは、蓋し當然の事なり、『國民の友』記者が、

●都會大、個人小

の一文、亦都會問題に關するもの、先づ都會の膨脹を論じて

村落の日本は漸く將に都府の日本たらんとす、久しく山林水郭の間に養はれたる雅致ある人民は、今や都會に移りたるが爲めに其氣習を變ぜんとす、居は志を移し養は躰を移す從來日本の特色たる家族的道德は斯の如き變化に向つて久しく其風を維持すべくもあらず、鄕黨の交を重んじ、老人を重んじ、自然を愛し、俳句を好みたる人民は漸く急迫となり、齷齪となり、事務家的となり、餘裕なきものとなり、規則立ちたるものとなり、薄情なるものならんとす

と云へり、斯くて今や都會は實力に於て日本の主人公なれり此の都會の膨脹を促せしものは重もに機械使用の進步せしによるとなし、總ての傾向は個人としての天地を狹み行けり、國家社會主義は夫れ或は此問題の解釋者たるべきかと說けり短文なれども頗る面白く感じたりき、然れとも記者も此大勢を敍したるのみ。未だ如何になすべきやを論せず、吾人は今や此解釋を爲すの必要を見るものなり。尙ほ都會問題に就て自今屢々論するヿあるべし。

（二十四）　家庭教育上の一問題

都會問題や、單に一部面より觀察するに止めず、前述せる如く有形無形の諸方面より察するの要あるなり、吾人は今其中の一、家庭教育上の問題を提出せん、茲には素より都會の家庭を指すものなり。

ストロングは米國にホームの缺乏せるを說きけるが、頃日外字雜誌は、米國家拜の衰頹を報じ、是れ俱樂部組織の隆盛與りて力ありとせり、我邦に之を見るに、家拜の如き稍衰へたりとするも、こは一部のヿにして、俱樂部組織の如き未だ隆盛に至らず、總躰より之を觀察すれば家族的道德の特色を尙存するものと云ふべきなり、想ふに俱樂部組織の隆盛に至るは、先づ家庭に於て俱樂部組織の現はれたる後にあらん。然れども都府の社會の現況は、商工業を始め各種の職業者をして、同業組合的とならしめたり、故に隣人相知らざるも、同業者、同主義者、同目的を有するものは、社交的なり、夫れ斯くの如く成り來りて、一個〳〵の家族奈何を察するに、實に現時は家族主義にて漸次に個人主義とならしめんとする傾向あり、都會は山間の湖水の如く、出口なくして溜るのみの觀ありて皆生活の競爭に忙はしく、居住定まらぬもの多く

孰れも知らぬ人々の集合が漸次固形するものなれば、今日の如き有様に於て、其の家族主義たるは當然なり。

茲に家庭教育上の問題ありといふは、他に非ず、東都の家庭を造るものを見るに、下等社會裏店の生活者流に於ては近隣相親しみ、一見同情濃かなるか如し、此所には幼童幼女群を爲して遊樂す、然り是れ邊陬の形を存するもの、然れども其相親み、同情濃かなる如き、深く之を察するに最下等のものにあらで、下等中の上等の部に屬するものなり、中等社會に至れば、家庭の樣一變し、子女の遊樂も自家の近隣に限り、他家の子女と遊樂するもの少なし、上等社會に至れば、更らに甚だし、例令は惡童に交る勿れとは、中等家族の敎ふる所、上等に至りては侍女あり、子守あり、聊かも他家の事に渉らず、一家を以て一國の如く組成す、些少の不便を感せしむることをせず、惡童と交る勿れと敎ふるの要なきなり、下等に至りては萬事不自由勝なり、惡童と交る勿れと敎ふるも、之を防ぐの道に缺く。茲に於てか吾人は知る、家族主義は益々歩を進むるの傾向あるを、又知る、交際も分業的にして、一小社會の環內に限らるゝことを、斯の如くして進歩せば遂に倶樂部組織の隆盛を來すべし、然れども現今は多々益々家族主義に成るもの特り多きを占むるは明かなり。

文書上に於ては立派なる道德論を聞く、博愛、世界的精神、社會主義論、甚だ美なり、而かも實際は中々に低度にあるなり、思想と實際の伴はざるは眞に社會の常態なり、一方には博愛を説くものあるは必要のことなれども實際に於ては盲目的に習慣の奴隷となるもの多きぞ、うたてし。家庭敎育上、此際如何になすべきや、習慣と趨勢に驅らるゝは、總じて免れざるとするも、家庭に於て家族主義を皷吹し、學校に於て形式的國家倫理説を皷吹せられ、社會に出づれば、凡て見れ知らぬ同志、又は熟知する同志の交際にて、孰れも利益的關係なり、刺激物夥多にして空想進歩し、實力乏しくして世路難たり、斯く家庭と學校と社會とは、孰れも別途の主義を皷吹するは、現況なり、是れ大勢なり、此大勢に就て世人は奈何に觀ずるか。

福澤先生　福翁百話中「子供の品格を高くすべし」の一文を載す、曰く

家風を美にして子供の美質を發生せしむ可きは勿論、又社會の風俗も之を平均すれば寧ろ美ならざるが故に子を養ふに隣を擇ぶことも亦大切なれども不幸に

して周圍の習俗不潔を免かれざるときは之に處するの法を如何す可きやと云ふに元來子供の性質は我父母を善き人と思ひ我家を樂しき處と思ふ心あるゆゑ此子供心を利用してます／＼之を養ひ凡そ近隣四方八方に我家ほど尊きものはなし我家人ほど品格の美なるものはなし我家こそ實に至美至善の樂園なれば斯る家に生れたる者は自から他に異なる所なきを得ず假令ひ近處の子供等は見苦しき言語擧動するも是れは他人の事なり我家の子は我家風に對して强壯活潑清淨潔白ならざるを得ず他人は他人たり我れは我れたり他人の惰弱卑劣なるは怪しむに足らず咎むるに足らず我家の子に限りて其卑劣を共にせざるのみとて恰も他に對して人種の異なるものゝ樣に取成し次第／＼に其精神を上品に導く時は幼稚軟弱の胸中にも早く既に獨立の氣象を生じ周圍の惡習俗に接して稍や傳染の恐を免かる可し或は實際の方便としては殊更らに我子の服裝を異にして他の子供等と區別するなどは自から効能あるが如し或は偶然に遠國へ住居を移し其移住地の群童と方言を異にして交際の親密ならざるが如きは最も妙なりむかし封建の時代に武家が町住居し又は田舍に家を移して尙ほ其子供の品格を落すことなかりしは自家の家風を一種特別のものとして恰も自信自重の城廓を構へ周圍の陋習を見ながら下流社會の常態と視做して齒牙に掛けざりしが故らん今や封建の制度は廢したりと雖も子供の養育に付ては家風を重んずること昔年の武家の如くにして始めて品格を維持して誤ることなかる可し

是れ中等社會及び上等社會の家族に於て、少數は之を爲し多數は之を爲さんとしつゝあるものに非ずや、是れ家庭を造るものゝ注意を要するのみならず、敎育家も皿大の眼孔もて視察すべき現象なり、思潮なり。福澤翁の勸むる如く、都會の家庭は敎へつゝあるなり、學校敎師たるもの、之に對して如何の聯絡を附せんとするか、素より兒童成長して後ちは、右の如き敎訓は是れ幼時家庭に於て止むを得ざりしとと悟る

べけれども、或は偏僻にして三歲兒の魂百までの習慣性を造りて、將來の發達上に影響する所なきか、家庭は斯の如く敎へ、加之宗敎的信仰漸次薄弱となり、家拜衰頹して個人的となる、這般の消息は主婦たるものも深く意を用ゆべきとなるべし、學校にありて博愛や、最高尙の道德說を學びし女生徒が、他日一家の主婦となりて子女を敎ふるに當り其家庭と社會によりて異なるべきも、吾人は現時の傾向と習慣とにのみ拘泥して、そが奴隷とならざるとを勸むると同時に、人は傾向と習慣にも據り、着々善艮法を取らんとを勸めざるを得ず、凡そ一家のとたる主婦の權に依りて左右せらるると多し、況んや子女の敎育に於ては萬端主婦一身の任に委せらるるに於てをや、されば一家集り一村集りて國家を組成するものなれば、先づ主婦たらんもの先んじて偏僻の習慣と固陋なる制度との奴隷たらず、理想とする所の敎育法を施さば、漸次全國の家庭も改艮せらるへきなり、最後に更らに繰返す、曰く一方には習慣と傾向を見て之に從ふと同時に、他方には傾向と慣習とを破るの覺悟あれと、若し然らずんば、家庭敎育と學校敎育とは將に相反するもの、兒童成長の後ち、其次

第を悟るの機ありとするも、此間に損すると必ずや多きを思はざるべからず。

(二十五)　京都人士と東京人士　關西の民家と關東の民家

早稻田伯、先頃郷里に歸られ、諸地方に立寄りて種々の觀察する所あり、歸京の後ち、某々新聞記者に談る所、甚だ面白きものありたり、今『日本』に記する所により、其中の一二を錄す。

京都人士と東京人士(古風論)　東都は古來封建的盟主の居城丈ありて獨り政權を集中したるのみならず亦た富も集權せられたれば日常生活の度頗る驕奢にして金銀の濫費も亦た甚だしく所謂江戸ッ兒的根性は宵越の金は使はぬてふ寸法にて意張り通し來りしが京都は之に反し貧乏公家を上流に仰ぎし程なれば富の度低く生活も亦至て質素を旨とし來れり譬へば東都にては花見の時節等に至りなば一夜百金を散ずる杯の豪奢は事太だ少からざれど京都人士は否らず提飯辨當に竹筒の冷酒を携へ十數の家族芝上に團欒して優遊自適終に人世の觀を忘る之を東都の濫費にして遊の沒風流なるに比すれば京都の方遙に風流を解するの度多しと謂はざる可らず予は信ず江戸ッ兒よりケチ〳〵と侮られる上方者却て勝つ時節の到來することあらんことを

關西の民家と關東の民家(美術論)　關東の民家に立入れば概して床の飾りもなく茶を呑む茶腕なども不潔にして家屋の構造もボンヤリとしたる所多く特に土藏粉壁などは滅多に見ることを得ざるが關西は然らず人民が淳朴なる丈け百事粉飾の態はなきも家屋の構造等は唯だ堅牢宏大に甘んぜず種々の工夫を凝らして建築し風流にて清潔如何なる蕭條落寞の貧村樂邑とても此裏五六軒の土藏白壁を見ざるはなし而して各家に立入れば大概の貧家迄は優美なる陶器に茶を盛り床間には一幅の掛物を懸けざるなし更らに人民の品位と教育とに觀ば實に關東の關西に及ばざるは遠く且つ夐かなり併し此原因は今日謂ふにも及ぶまじ

教育

音樂趣味の教育を論じて音樂學校に及ぶ

鷗村生

囊に幸田延子女史歐洲より歸朝し、金龍山畔綠陰なほ淺き處に一度びわが多年海外脩養の妙腕を振ひ妙音を繰りし以來、音樂の事漸く世上の注意を惹きたるが如くに見え、音樂學校はまた女史を得て、やゝに活氣を持ち上げたるが如くに、該校内に同聲會の組織せられたるも、其一現象たらん。此時に當り吾人は、更に國民教育に於ける音樂の必要を思ひ、從つて之に對する音樂學校の責任に大なる囑望を置けり。

音樂を以て單に遊戲の業となすは、我國人傳來の謬想にして、外邦人の之に重きを置くことの甚だしき、實に敬服に堪へざ

るものあるなり。ルーテル以來獨乙に一の諺あり、曰く音樂なき所には惡魔ありと、獨乙は武勇を尊ぶの國たると共に哲理の研究を喜び、而もまた音樂を以て、他邦に秀で、ベトーフェン、モツアルト、メンデルゾーン、ワグナル以下世界名譽の大音樂家の多數か、其籍を獨乙國民中に列すること、實に彼國の誇りなり。英といひ米といひ佛といひ又露といひ之を敬重すること敢て彼に讓らず。彼國の士人淑女にして音樂の興味を喜ぶことを知らざるはなく、其教會と其學校とは、常に音樂を伴ひて、人民を感化し教育するものを、彼等によりて音樂の悦喜推重せられずしてやむべけんや。而して我邦人が、西洋音樂を受け入れて之が趣味を解するに至り、併て在來の音樂をも尊ぶに至りたるは、實に米國宣教師の功に歸すべくして、彼等は基督教の傳道と共に、西洋音樂を輸入し、邦人をして音樂の重んずべく、喜ぶへきを教へたるなり。由來米國人の如きは、音樂の趣味を解せざるを以て、人の耻ちらふべきの事と思へり。宜なるかな彼等が我邦に來りて、宗教及び教育に從事するに當り、其最初よりして、音樂の奬勵に勉めたることや。彼等は先づ瀛西樂仙の餘韻を教會の講壇に響かせて、次きには之を彼等の設立したる男女學校の教室に響かせたり。邦人の未だ西樂に對し殆ど一の趣味をも有せず、文部省が伊澤脩二、瓜生繁子等によりて音樂取調所を組織するの前、明治五六年の交に於て、京濱阪神の間に創立せられたる數多の宣教師女學校は、實にピアノ、オルガンの音樂を以て、學科の重きに置き、教師等皆自ら率先して、生徒が音樂趣味の養成に意を用ゐ、斯技の振興を奬勵志たりき。彼等はまた其男子學校にも之を輸入することに後れざりし志なり。故に我國に於て音樂が尤も早く味はれ、尤も早く發達せし處は、基督教會に聯屬せる區域内にてありけり。加之今日にても、吾人は堂々たる日本唯一の音樂學校の音樂が、基督教々育に屬する音樂に對して、果して毫の遜色だもなきことを得るや否や疑ひなきこと能はず。地方の音樂に至りては、小學校若くは高等女學校の未熟なる風琴の彈奏、不調子の唱歌は斯道の教育に於て極めて少量の効能を有せるのみにして、其全權は實に此處彼處に存在せる宣教師女學校の掌握する所となりて、多少の勢力を及ぼしつゝあるなり。然れども尤も早く進歩したる基督教會聯關の音樂と雖も、

之より外人の分子を取り除かば、なほ甚だ幼稚なるものの其跡に殘さるべく、而して日本樂道の中心たる音樂學校の如きも、樂界に於ける勢力の極めて乏しきものたり。故に概するに、今日樂道の進歩は頗る幼稚初階のものにして、事實上、邦人樂士の作に成れる新曲なきに非らざれども、單純なる軍歌進行曲調位に過ぎずして、それとても必ずや在來の曲節に幾許の手加減を加へたる迄にとゞまらんなり。また唱和せらるべき邦語の唱歌に乏しき所以、蓋し一は詩作界の不振なる狀態に在るが爲めなりと雖も、假令新作詩歌の尤品の、以て歌唱するに堪へたるものあらんにも、今日の如く樂師曲譜家に其人なきに於ては、未だ以て或は優美に、或は壯烈なる唱歌謠のあるべきを望むべからず。而もまた今日の唱歌作が、鳥居忱氏一派の人によりて左右せられつゝあるに於てをや。「君が代」が、日本帝國の國歌として滿足せられ、外山調の新體詩が、單調無味なる曲譜を取り、軍歌として唱和せられて悦ばるゝ時代の國民は、未だ以て音樂の趣味を蓄へたるものと稱すべきに非ず。

以上音樂と凡稱するもの、實は西樂を意味して、これは輸入後日猶淺ければ、其發達進歩の度に向つて多きを望むべきに非らざるに於て、翻つて日本在來の音樂の狀態を顧みれば、其衰微の久しきに亘りて、今なほ單に舊套を墨守するに止り、西樂輸入後彼に伴つて、聊か振起し、世並みに、音樂會などへも屢ば顔出しするやうになりたるもの、此樂たる既に其達し得べき極點にありて、なほ樂としては頗る幼稚の發達を遂げたるのみ。故に將來我邦の樂道として、發達せしむべきものは、樂器、節奏、音階、曲調、發想に於て、尤も完全なる發達をなしたる西樂たらざるべからず。西樂は即ち日本樂道の主權者たるべきものにして、國民は既に西洋樂器を假りて以て、其情感藻思を遺憾なく彈奏せんとに志せるなり。而も國民敎育の具としての音樂は、必ずやこの完全にして、尤も多くの趣味を備へたる西樂に依賴せざるべからず。西樂東樂、此二者眞價の優劣は兎に角に、吾人は幼稚なる在來の音樂を以て、敎育上子弟の音樂趣味を開發し得べきの捷徑を有するものなりと信ずると能はず。普通敎育上音樂の要は、其趣味を開發するとに在りて先づ藝の熟達を思ふものに非らず。而して音樂趣味の開發は必ずや、西樂に俟たざるべから

ざることとは、世の敎育家、既に幾許の經驗を得たるならん歟。

音樂の趣味の開發は、敎育上甚だ緊要なる條件なり。櫻痴居士が今の學者の宗敎心と歷史の智識とに加へて、音樂の趣味に貧しきは、彼等をして物質、實利にのみ馳せしむるの所以なりといへる、言頗る事の要領を得、殊に音樂趣味の缺乏を擧ぐるは、尤も穿てるの語といふべし。音樂は天地にみてる諸音、調音の神秘が、壓板、絃線、管口に觸れて吹彈し出さるゝの聲なり。此聲の趣味を解し、快感を覺ゆるものの平和の調には神濟み、體胖なるを感じ、悲哀の調には潸然として紅淚の下るを覺えず、壯烈の調には心跳り肱張るを見るのみならず、而も妙へなる音樂の聲には、野の馬も秣飼ふをやめ、淵の魚も浮び出づるためしも稀れならずとかや。樂の力たる天に在りては鬼神を動かし、地に在りては蛟龍を舞はしめ、人に在りては男女の衷心を薰和し、其美想を啓發するものたり、斯樂は正樂をいふ。鄭衛の樂、其正しからざるものに至りては、彼と相反して、是亦畏るべきの害毒を及ぼすべし、謹まずんばあるべからず。此故に先王はいたく邪樂を排するとありて、而して正樂を以て士人を敎ふるを禮の次ぎに在りて、今人もまた之を以て敎育の要素となす、夫れ人、美觀の思想なきはいふに足らず、美育於此乎其要あり。然るに音樂は、諧調和音の妙聲によりて表はるゝの美術にてある丈けに、他の美術に優さりて、其感化の境域と勢力とに尤も廣大に、其幽趣妙致の尤も解せられ易きが為に、音樂は人心を薰和するの効に於て、他美術の企て及ばざる處あり。美育の之を以て尤も重要なるものとなす所以實に玆に在り。

音樂の趣味が敎育上薰化の効力は實に驚くべきものあるなり。イスラエルの歌仙ダビテ王が、其なほ牧羊の兒たりし時、立琴を彈じて、時の王サウルが頑迷なる靈魂よりして、惡鬼を退避けたりし、其古の不思議は、今なほ斯道によりて演られつゝあるなり、獨乙または米國にて於ては不良少年を感化敎育して、彼等少年の溫和從順の德性を養成せんとするに、音樂を以て尤も大なる効力を奏し得べきものなりと認められたりといふ。如斯き効化を有するものなるに於て音樂趣味の養成の敎育上振作せしめざるべからざるの理ます〳〵明かなり。然るに我邦音樂趣味敎育の進步は實に緩慢驚くべきも

のにして、小學教育より中學教育に及んで、國民は那計の音樂趣味を以て教育せられつゝあるや、之を量れば、其極めて微小なるに痛嘆せずんばあらず。さらば今國民教育の音樂趣味開發を昌んにし、之を進歩せしめんとならば、現今の小學校の音樂をして、なほ數層の重きを有せしめ、また尋常中學に音樂の科を設け、兩者共に精良なる樂器を備へ、堪能の樂士を聘して教授の任に當らしめ、其躰育に注意するが如に、之に注意し、之を奬勵すべし。また高等學校、各種專門學校、帝國大學等に於ても同樣音樂趣味の養成に怠らざらんことを要す。如斯くに音樂を振作奬勵するの結果は、教育上必ずや喜ふべきのものあらん。吾人は是あるべきを信じて疑はざるものなり。啻に今の學者のみならず、其學者の前生たる下は小學生より、上は大學生に及んで、我邦男子の學生の狀態を見るに兎角に鄙野粗暴に流れて、寛大優長の風に乏しく、實利的物質的に奔りて、精神的靈性的に缺たるの弊あるは、一には宗教的の教育を受けざるが爲めなりと雖も、また以て美育に缺乏せる爲ならずんばあらず。今この弊を救ふに、音樂趣味の教育を以てせんには、奏功必ずや著しきものあらん。戰後教育の尙武的なるに偏向すると、たゞ其儘にして進歩せんには、學生をして、必ずや益々鄙野粗暴なるに馳せしめんとす。子弟の教育、要するに外よく勇剛に、內よく寛裕ならんことを期し、外邦所謂紳士の品格に倣ひ、我邦古に在りて士人を教育したるの道に範るべし。兵馬倥偬の陣中に懷を詩歌にやり、情を吹笛に寄する古英雄の躰度は、以て國民教育の摸範たらしむべき所なり。故に美育の主たる音樂の教育は、尙武的なる今後の教育に於て、殊更に必要ありとす。且又音樂が其壯烈悲壯なる發想をなしては、國民が武勇の精神を奮興せしむるに於て、著大の効力あらん。吾人は彼獨乙國民が、武勇を以て他邦に秀づると共に、音樂を以て世界の雄たることを羨望す。彼二者は實に剛柔相托して、其國民が精神の雄大なるを致したると必ずや多きに居らん。されば獨乙聯邦の大功業の、素より、モルトケ、ビスマルクの鐵血政略の結びし果なりとはいへ、其一半は實にアルントが Was ist das Deutchen Vaterland ? の國民歌曲に歸せざるを得ずと稱するもの、豈に偶然なりとせんや。

國民の音樂趣味に要する所多きは、其教育によりて供給せら

るべきは言ふを待たず。今夫れ歐米各國に於ては、教會の音樂なるもの、國民が音樂趣味の開發に補ふ所甚だ多しと雖も、我邦に在りては、未だ如斯きを望むを得ずして、主として之を各種學校の音樂に俟つべきなり。各種學校の音樂を擴張興作すべき方案は前に述べたるが如くにして、而して此擴張の原動力を支給すべきもの、素より其幾分を宣教師派男女學校に仰ぐとあるべし、然りと雖も我邦音樂教育の中心たる音樂學校は、其尤も多くの部分を供給すべき責任あるものにして、盛んに堪能の樂師を養成して、彼等をして國民の教育に從事せしむべきなり。然るに該校の進歩なほ幼稚なるに加ふるに萎靡振はず、曾て獨逸の體面を持ちたりしも、今日にては僅に高等師範學校に隷屬して其形ちを存するの觀あるに過ぎず。當路者も亦之に多くの注意を拂はざるもの、如し。其樂堂に一臺のパイプ、オルガンの備へだになきと、其體面に於て損ずるとなきに非ざるも、これなほ可なり。其教授の任にあるもの、今や一人の幸田女史を獲て、やゝ志を堅うするに足れりと雖も、女史以外未だ名手其人ありとも聞かず。樂界に於て、該校の多く推重を加へざるも亦止むを得ざるなり。如斯きは吾人が我邦樂道の爲に悲む所にして、また國民音樂教育の上に囑望する所多きよりして、其勢力の微々たるを嘆ぜざるを得ず。音樂學校は實に其責任の爲に擴張進歩せらるべく、吾人は、また當路の教育家が此校に多くの注意を加へんとを希はざるを得ざるなり。

各種教育會の事業

首都には大日本教育會の多數の會員を有して成立せるあり、彼は各種教育會の首長たり、然るに此會如今何等の事をなしつゝあるか、月並みの講演と月刊の雜誌と、毎日の圖書館開館との外はこの多事多端なる教育界に向つて、幾許の事業をなしつゝありとも覺えず。之と對峙して一時勢い猛んなるの觀ありし、國家教育會は、伊澤氏去りて後萎靡振はず、其「國家教育」と名くる機關雜誌の如きは、教育雜誌中尤も見るに足らざるのものなり。更に地方に於ては各府縣下到る所として一の教育會の組織を有せざるはなく、其教育會たる、多くは知事又は書記官を會長となし、師範學校長、中學校長等を重役に据ゑ、宜々の組織を搆へ、一の機關雜誌を有す。此等の教育會は必ずや其縣下の人才を網羅して成立られたる者ならざるべからず。然るに彼等の事業の多く官途に會餘せる丈けに、さらば其縣下々々の教育界を監督し、之れを操仰獎勵するの力を奏し得るやと顧みれば、吾人は云ふ此點に關して疑ひなきを能はず。地方教育會の機關雜誌の、其の地方俊出の人才の手に在る割合に讀むべきの教育論もなければ、また其の地方教育の研究などの報道なども乏しく。大日本教育雜誌等よりの轉載論文が其の重要部分を占め居ると は、餘りに意久地なさの限りならずや。其の月次の會合、教育問題の研究などい

ふものが、多くは形式計りの事にて濟み了るとなきか。夏部講習會の開設が夫程迄の功能もなきとなきか。要するに地方教育會が其外形さ組織さに於ては廣大にてあるかなれども、其事業の擧らざる所以はもさよりの事にて、由來一つの主義を以て結合せるに非ずして、半官的方策をさりて、官立學校教員は勿論の事列任以上の縣吏郡吏村吏等には入會の義務あるやうに仕掛け設き、また會員の方にては、止むを得さる義務さ思ふて、毎月十錢計りの會費を納め、一部の雜誌の送附を受くれば、大概は開きても見ぬさいふ有様あり。地方教育會が如斯き會員のみより成立するものにも非らざるべけれども、さる仲間のもの多分を占むるは疑ひもなき事なり。而して又其教育會に重きを任ずるの人が眞に地方に對する其教育會の責任を感じて、其事業の進捗を計りつゝあるやさいふにも、これも甚だ疑はしき事なり。其事業の擧らざるまた當然なりさいふべし。

然るに今各地方教育會が、眞に經綸の才ある教育家によりて、運轉支配せらるゝとあらんには、吾人は其事業の著しきものあるべきを疑はず。これが運動に關しては、官途貴緣のあるに加ふるに、多くの唯々諾々する會員の多數を有して、金力に於ても相當の餘裕あるを得べきの便利なり。かゝる便利は必ず何れの教育會にも備はり居り、また備へ得らるべく、而して、之を運轉するの人なきは、彼等をして、殆ど無爲の會合なるに留まらしむ。故に吾人は各地方教育會に向つて一策を呈せんに、一教育會ごさに、師範中學の校長に匹敵すべき程の資格ある一名の教育家を聘して、其事務主位さなし、其地方万般の教育界を觀察調査せしめんとなり。如斯くなれば自ら其教育會に實際の重みの加はり、運動活潑に、教育上稗補する所必ずや多からん。

なほまた地方教育會に望むべきは、相當の資金を投じて、各地方の人情風俗等社會心理の調査に從事せんとなり。地方教育會たるは實に、之をなすに、尤も適當なる便利を有するものにして、またこの種の研究が、學術上、社會上甚だ必要なるのみならず、また其地方々々の教育上に報酬すると、必ずや多からん。兎に角目下の地方教育會に望むべきは、其が幾多の便利を利用して、斯會の爲に盡瘁し、徒爲の會合たるに止まらざらんとなり。

○小學教員失格者問題

全國各縣の高等、尋常小學の正准教員中數萬を以て算すべき多數者は其資格を下り、或は全く之を失ふものあり。一時に數萬の小學教員を失ふと我教育界の爲に大に慮からざるべからざるの事にして、各府縣共に之が善後策に怠らず、今や正に教育社會の一大問題さなれり。本年度地方官會議諮問案中尋常師範學校擴張案のありたりさいふも、亦一は之が爲めなるべし。

○海嘯地の教育

三陸海岸海嘯被害の爲、流壞したる學校數岩手縣廿四、宮城縣二、青森縣一、流亡教員數岩手縣十八人、宮城縣二人さ、而して該地の教育界は全く蹂躙せられて、善後策未だ眞道ならず、文部省は吏員を派して、其實況を取調べしめたり。これが救治の爲めに或は國庫補助を俟つに至るべしさいふ。また其教育救災の爲めに義捐金を募集するもの、岩手縣には二種の發起あり、其一は同縣下十五教育會の聯合せるもの、他は有志者十八名の發起たり。宮城縣にてもまた同樣の發起をなすものあり。教育時論社また學校救災義金さ稱して義捐金を募集しつゝあり。

教育報知記者は被害地善後の大計さして、文部當路の人に求むるに、教育上よりは元より必要なりさ雖も、彼地方は水產を以て民の唯一の產業さなすもの、故に水產教育の大擴張尤も必要にして、故に先づ岩手縣宮古の水產學校に加ふるになほ一の水產學校を八戸に設立して、經費は無論國庫補助さなし、罹災地方の子弟には官費生たるの特典を與へて、今后大に水產の進步を計らざるべからずさ論せり。

○海嘯と教育

教育時論記者三陸海嘯災害を便利して、子弟に授くるに、同情心の養成、命運的感動の涵養、公共心の啓發、地文的智識の増加を以てし得べきものなりさ説く。

○忠義論の爭ひ

民友記者「訓練したる忠義心」を論述す、東奥の海嘯に一小學教員が陛下の御影

の海水に沒するを救はんが爲めに激浪中に飛び入り、之が爲に死を招きたり、然るに天皇の御影固より尊ふべし、而も天皇の赤子たり、臣民の一人たる一身もまた尊からずや、死して御影に殉すると、活きて臣民の一人を全うすると孰れ果して何れを是とする乎と論じ、國民新聞の城北生また同樣の議論を繰りかへして、端なく、喧々の議論を沸騰せしむ。論駁するものは曰く聖影はこれ軍隊に於ける軍旗の如く、學校に於けるの精神なり、死以て之を守るべしといひ、而して民友一派の人は如斯きを以て事理に暗き忠義心の致す所なりとするなり、由來我國民君國の爲には先づ死を思ふて生を後ちにし、君の馬前に打死するを以て忠義の骨頂となすの思想を傳來せり。これ戰爭が外交よりも榮とせられ、彼小學教員の行爲が美談として傳へらるゝ所以なり。

○教育界の缺乏二三

曰く小學教員自重心の缺乏、教育家德義心の缺乏、教育家が大度達觀の缺乏、士人的教育の缺乏、趣味的教育の缺乏、靈性的修養の缺乏、既に是れあり、教育界の萎靡不振寧ぞ怪しむべしとせんや。

國語、漢文、英語

國文の教育は日本國民をして、祖國の風俗習慣を學ばしめ、祖先の精神理想を知らしむる所以なり、國民の教育は之に重きを加ふべし。然るに今の國文教育なるものを見るに、單に字句の穿鑿古語の註釋に日を送り、しかも教師其人なきが爲に、諸生は國文の死したる方面をよみて、彼が活きて國民の精神間に生動しつゝある方面を習はざると多きに止まる。彼等は國文の趣味を學ばずして、形ちの推究に苦しめらる。されば中學校等にも如何に多くの學生が、國文の課業に身を入れず、甚たしきは居睡りを以て其時を過し、先生が喋々の辯を、チンプン歟と聞き流がすかを見よ。國文の教育於是乎形式となり了る、國民教育のよりて立つ處などいふも、其實は効能もなき事なり。これをして眞に有効の用をなさしめんとなれば、教師は先づ活きたる趣味を曉りて、而して後諸生の趣味を啓發すべきなり。普通教育に於ける文學は趣味の開發を以て要とす。

國文の漢文と密接なる關係によりて教育せらるべきも、恰も國語の漢文に於ける關係に等しとなす。然るにいかにして漢文を以て國文と聯關して教育せらるべきか、漢文は國文と聯關して國民精神の修養に率すべし。漢文學は我國民の祖先が、其思想を學びし處にして、而してまた之を假りて其思想に不滅の生命を與へたり。之を學ぶの要、國文と共に輔車相依るの勢をなす。然るに今の漢文教育なるものを見るに、これ亦國文と共に左も趣味なき空文の教授にして、また生徒の居睡りを促すものたり。如何にして有趣味有効用の教科たらしめんか、今後の研鑽甚だ必要なり。近日結會せられし漢學者六十餘人の會合の如き、また此點に於て大なる考究あるを要すとなす。漢文をして日本人教育の上に活用をなさしめんとならば、先づ普通教育上の有趣味有効用の教科たらしむへし。

國語漢文の聯絡して教授せらるべきは勿論なれども、吾人はまたこれ等を英語と列び行はれて教授せらるべきものと信ず。三科目の普通教育に於ける文學なる總括の下に一致して教育せられ、互に趣味の啓發を輔佐せしむべしとなす。又文學としての比較價位に於ては國語漢文は以て英文學の高尚雄大にして、宗教的なる處靈性的なる處に及ばず、英文學は尤も高尚なる文學なり、この文學の趣味を以て日本國民の思想の上に加へて、其精神の修養をなすべきものなりとす。然るに尋常中學位の程度にては迚ても英文なる高尚壯大なる思想を解せしめ得べきに非ず。故に要する所は國語漢文の教師が英文學の趣味を解するの人たらんとを要するなり。この三語たるもの、普通教育上、素より其訓練的ヂシプリナルなるに要する處多しと雖も、文學としての趣味の教育の上には、たとひ訓詁穿鑿に精通せざらんも、文學思想に富める一人の教師によりて、教授せられん事こそ望ましけれ。

○夏期講習會

今や正に教育家諸君が夏期講習會の時節となれり、地方到る所にはこれの開かるべきあり、また東京には大日本教育會の盛大なる講習會あらんとすると例年の如し。教育家諸君が此會に際して、學の滋養に一層の蘊蓄を加ふる頗るよし。學科の勉强や甚だ必要なり。然れども吾人は諸氏が此時を利用して、互に其經驗を談じ、道を語り、鍛錬の心に聽かんとを欲す。これ等によりて利する處は、秋期再び學堂に立つの日に於て數多學科の研究に優れりしを發見すると万々ならん。殊に老練の人を求めて其教をきかんと多もよしとなす。

評論

加藤博士の賣淫論

久津見蕨村

女學雜誌記者足下、予は足下の發兌せらるゝ女學雜誌を講讀するものならねば、足下が尊雜誌上に掲げられたる、加藤博士の賣淫に關する高見を直接に閲讀したるにはあらず。他雜誌の摘要に由りて、後てその高見の一斑を窺ひたりしものなり。されはこれに就て漫に駁論をなすは、大早計の業なるべし。然れとも、博士か賣淫は何故に不善なりやとて、擧けられたる五個の理由以外に、人類社會か賣淫を以て道德上の不善となすには、重大の理由あるものと信するなり。貴雜誌には、敬虔なる寄書家に富まるべければ、この重大なる理由を見出されて、既にこれを貴雜誌に投せられたるもあらん。予の云ふ所は、恐らくは遼東の豕なるべけれとも、而かも、予は世の女德の爲に、これを一言して貴雜誌に投するを無用ならさるべしと信ず。

然れとも、予か博士の論に服しかたしと云ふ所以のものは、或る論者の如く、一片の感情前信の固執よりするものにあらず。博士か社會に既存して、普通に倫理上の理想たる、賣淫不德の思想に滿足せす、これに向ひて疑問を試られたるは、正にその科學的精神の社會に存する前信を固執せさるにあるを諒せり。予はこの精神に對しては、毫も批難すべきものなしとす。然れとも、その推論せられたる所は、予を以て見れは頗ふる不充分なりとする所なり。

予は敢て博士の高見を批駁せんとするにあらす。別に予か賣淫を不善不德なりとする理由を述へんと欲するにあれは、博士の推究に對しては詳しくは云はさるべし。又其の理由もこれを詳述せんとすれは、貴重なる紙面の妨けなるべきを以て、こゝに唯その綱目と大躰の理由とを云ふべし。

第一賣淫を不善不德なりとするは、人間か禽戰に離れて、高尙なるものとならんとする欲望の一結果なり。朝に平氏を送りて、夕に源氏を迎ふ。朱唇千客の嘗むる所ろとなり、玉手万人の枕となる。これ禽獸界の事に同じ。人間か禽獸

と異なるものにして、これよりも高尚なるものなりと觀念するには、さる禽獸同樣の事をなしては、人畜の別絶えて不都合極れり。こゝを以て禽獸同樣の事をなす賣淫は、これを不善不德となすに至れるなり。さては少しく進みたる人類は、男女の交情を猥にするものを責めて、不善不德とするならすや。

第二賣淫を不善不德とするは、人類天然の愛情の發達したる一の結果なり。男女の戀は人類天然の愛情の一にして、全く本能の一なり。されどこの情は極度に登れは、或は我を忘れしめ、無我的他愛心となることもありと雖、而かも、一般の塲合には、我と云へる要素を第一とす。我か愛する男、又は女よりして、我を單一に愛せしめ、以て我戀情を滿足せしめざれは已まざるものなり。然るに、賣淫はこの愛情を遂くるものにあらす。譬へは、彼は或るものに對して、單一にこれを愛しつゝありとするも、外觀はこれを許さす。又これを許されさるを以て、彼れの本色とす。これ人類天然の愛情を亡するものなり。愛情の發達したる人類社會に於ては、かくの如き沒愛情的所行を、正善とは認めさるなり。

第三賣淫を不善不德とするは、人類に人生の大事を玩弄するを厭ふ情あるが故なり。再生統系の作用たるや、個人より見は、何の意味もなきに似たれども、廣く宇宙の大運動より見は、目的ありて爲す所の如し。併しこは宇宙の意匠に關する大問題となるべきものにして、議論未決のものなれは、よしや充分の理由となるべきものにもせよ、こゝには提出せさるべし。されど、生殖機關の作用たるや、少く進みたる社會に於ては、皆これを人生の大事の一とせり。婚姻の儀式に關する、種々の典禮あるを以て知べし。されば、これを濫用し、玩弄するは、進みたる社會に於ては、皆これを不善不德とせさるものなし。賣淫は生殖機關を濫用するものなり。玩弄するものなり。即ち人生大事の一を玩弄するものなり。

第四賣淫を不善不德なりとするは、進みたる人類の、肉それ自身を賣ることを耻つる情あるに出づ。相撲の土俵の上に裸體を現はし、俳優の舞臺の上に所作を見する、一見すれは肉を賣るに似たれども、これその所作の結果を賣るもの

のにして、相撲の技術、脚本の意味を公衆の娛樂に供するものなり。決して肉それ自身を賣るものにあらず。之に反して、異形奇兒の見世物、若しくは裸躰それ自身の縱覽は、進みたる人類社會は、これを不仁とし、これを羞耻とし、若し之れを敢てするものあらば、これを不善不德とす。然るに賣淫は裸躰それ自身の縱覽よりも甚だしき事なり。猥に人に許さゝる所を、縱にこれを万人に許すならずや。加藤博士は、羞耻的の事を羞耻的に取扱ふものと云へりしかども、源平藤橘、いづくの馬族牛種を問はず、來るに任せてその肉を賣る、これを羞耻的に取扱ふとは、云ひかたかるべし。

第五賣淫を不善不德なりとするは、進みたる社會の道德の理想、――詳しく云へば貞操の理想に反するが故なり。蒙昧の人類は扨て措き、進みたる人類社會にありては、――譬へば一夫數婦の國なる我國の如きにありても、貞操と云へる事を女德の一理想とす。妾と雖、その主人の外の男子に見ゆるなば、社會はこれを不德とすべし。政事上に於ては、賣淫を已むことを得ずして公許する事ありと雖、而かも、この貞操の一理想に反するの所行をなすものなる事は、進みたる人類の一般に承認する所なり。抑も道德理想の構成せらるゝは、道德的感情に原因す。道德的感情の起り來るは、各感情の撞着を避けて、一致を保たんとする心的作用にあるべし。第一より第四に至る原因は、その初めや、唯一片の感情にして明瞭には意識せさるもあるべし。而かも、これ等の片々たる感情の一致を保たんとすれば、即ち一方には賣淫を不善不德なりとする理想を構成し、又一方には貞操と云へる理想を構成するに至らざるべからす。これ心意の進化とも云ふべきものなり。――これに就て、予の心理上の想考ありと雖、長ければ略す。

女學雜誌記者足下、予が社會の賣淫を不善不德と認むる所以の原因とするものは、先以上の五項なり。人身賣買の如き、風俗壞亂の如き、この問題に多くの關係なきにあらざれども、そは今日の社會にては、最早論するを要せさるほどに、人の能く是非を解する所なるべしと想へば敢てこゝにこれを云はす。

き人なりしなど論ろふものこそ恐ろしけれ。吾人は但だ其下に座して其一端を窺がひ、僅かに看取し得たる所のものを奉じて以て自己を修練せんと欲する耳。抑そも、他を裁斷する何等の用ぞ、人の全躰を品評するとは、難きと同もに用なし。吾人は只だ其の流るゝ所に汲み、其及ぼす所に考ふべきのみ。況んや、古賢先聖に對するの地歩に於て、安くんか僭越無禮にして可なるべきぞ。徒らに之を品評して喩えば、紫紅を判せんとするが如きは、抑そも小人の所爲のみ、遂に徹透せざるは其分なり。吾人は此邊の旨意をもて、常に基督の評論を嫌惡す、曰く、人、曰く、神と。評論そも〳〵先づ嫌惡すべき也。苟くも宗教道德の道に於て崇拜するや、之に神權なくして濫たれりとするものある乎。之を神の如くせざるは、即ち尊奉せざるに同じからずや。此時に際して切要なるは、主觀の吟味のみ、客觀の品評にあらず。自己心衷の態度、誠意を盡し、精神を盡して、神として仕ふるにあらざるよりは、遂に何の活力かある。故に吾人は基督を評論したるとあらず、只だ信ずるのみ。評論は未だ信界に達せざる人士の爲すべき事業なり。

隨感

○鑑識の道高潔にあり

人を鑑識するの道は、先づ自から潔よくするにあるらん。吾が情感の由來に省りみて、其の眞僞精粗を覺り、吾が喜怒哀樂を尋ねて、常感常識の程度を辨ずるなど、亦た益あるべし。然れども要は、邪念を折斷し、利己を壓服し、公平大氣、徹透明朗の意識を磨して、無念無想、他の來つて自然に映ずるを待つの外なし。もし一と度び我感を作して、我執に泥まば、鑑する所ろ着々として誤まらずと云ふとなし。願はくは、我、批評眼を以て他を見じ。況んやかの細作探偵の如くするものに於ては、たとひ少しく明察の狀を呈するとも、遂に將た何等の大識をか得んや。これ吾人の倣ふべきものにはあらざる也。

○評論は信仰にあらず

古の聖賢を評して、容易に其範圍を定め、一言して斯々の如

○釋尊を評する基督教徒

基督教徒にして釋尊氏を是非するものあり、吾人之を聞くに際しては、直ちに先づ其評者の人物と釋尊氏とを比較す。人物の未だ及ばざるものは、其の優者を是非するに堪へず。たとひ是非すとも、聞くに堪へざる也。凡そ宗教道德に要とする所のものは、實際の人品にあり、豈に議論にあらんや。此、に於てか、品格なきは智識なきに均し。未だ釋尊氏に及ばざるもの丶漫に此聖者を評するや、遂に如何なる段階の智識によりてか論ずる。達せざれば見ることを得ず、見ることを得ざれば何によつて判する。區々たる下等の品評は、毫も上者の本領に觸及することを得ざる也。

○消極、積極

佛教を評して消極的と云ひ、禪悟寂滅を評して亦た消極的と云ふ。凡そ、單に消極的のものにして而も能く行わるあらば、其行はるるの勢力は即ち積極的也。積極消極豈に二ならんや。只だ地と勢とを異にしたる方向の別途に付て立論するのみ。何んぞ之が優劣を定むべけん。もし消極的は即ち弱性なる也と云はゞ、佛教の弱性となりたるは時勢のみ、其の本躰にあらじ。何となれば、初めより弱性にして、適種生存界に能く優者の地歩を占むることあらざる可ければ也もし時勢の變遷に付て之を言はば、基督教も亦た消極的の地歩に立つことあらん。其の宗派の消長に於ては既に現に此の事例を見るにあらずや。禪悟寂滅を指ざして、消極的、受動的など評可し去るものに至ては、只だ外人の書籍を譯したるか、もしくは未だ自から實踐せざるかの故のみ。たゞ一笑に附すべし。抑そも、消極積極は二にして、一。もと活力の兩方面、兩方向を比較する時に於て言ふべし。一の活物を指ざして、全然消極的なり、全然積極的なりなど言ふときは、遂に能く其本躰を實現することを得ざるべし。

○亡夫の遺業に仕ふ

今年蠶作可ならず、四方皆な其災を言ふに、ひとり、福島の蠶業名家丹治ふか子、精繭數顆、綿寸葉を送致して報を寄すらく、非常の苦辛、以て稍やく平作と同じふすることを得たりと。

則ち鑑擒するに眞に驚ろく可きの佳品なり。抑そも、丹治女史、其人の逝くに後れてより、其の偉業を視ると猶ほ亡夫の如し。爾來、惣ての貞思、惣ての熱誠、捧げて蠶業に從事し守操十年、未だ曾て一日も偸ろず、利の爲に非ざる也、名の爲にも非ざる也、只た一片の熱愛、亡夫を追ふて、執着其遺業を忘るゝ能はず、衷心の秘密、實に戀思の凝つて敎する所あるに由るもの丶如し。吾人、斯して其の産繭を熟視すれば光澤、精緻、亦自から別色あるとを覺ゆ。嗚呼、これは是れ夫亡人身を寄するの愛子にあらずや。

○米國民の精髓

在米國大須賀亮一君の近信に據るに、器關の壯大なる、人事の繁劇なる、致富の殷盛なる、未だ必らずしも驚ろく可きにあらず、敎育上の新思想豊かならざる、敎會内の腐敗少なからざる亦奇しむべきにあらず、但だ仔細に觀察して驚歎贊美に堪へざる所のものは、善良の士人貴女、基督に奉公忠仕して、如何にせば其御心を躰するとを得んかと、日夜冲々苦慮する切なる眞衷を観するにありと。嗚呼、此の遠玄なる泉頭あり、迸發して世界を動かすの大事業となる所以のもの、其道抑そも深長にあらずや。

○ミションスクールの將來

吾人迂にして屢ば無用の建策を爲したりき。今にして之を念ふに、多數ミッション、スクール將來の一般方針は、之を純乎たるミッショナリーの監理に歸せしめ、愬じひに邦人の意見を徹せんとて、强ひて半青半紅の製造を爲すとなからんにあり。或人曰く、如此くせば、國家的思想なき准西洋人を見ると多きに至らんと。左れど、帝國の同化力は如此く薄弱なるものにあらじ、一旦緩急あるの日、所云ゆる國家的思想の陽發すると、夫れ若く儆々たりとせんや、若し彼の趣味文藻に於ては殆んど西洋人の如くなりたる邦人、よしんば一二万は出來たりとも、四千万人中に之を混融利用するの結果や、遂に邦家の活益にあらずと云ふとなけん。巨想を懷かんとする帝國民は、敢て暴りに杞憂するとを須ゐざるべし。吾人は數年後内地雜居行はるゝの日に至り、純然たる外國人が監理せる學校の更に大ひに增加せんとを希望するもの也。

雑録

貧民學校女敎師の述懐

川井小雪

吾神の召を蒙りて暫し米國人ガイ氏と共に事をなしぬ。人と共に事をなさんはいと爲し難きものと吾日頃思ひたりしに、さて其事に從へば吾が思ひたるに似でいとたやすく出來たりしぞ、之れ神の惠なるべけれど吾れ心に深く感謝しつ。米國人ガイ氏は吾其許に行きてより程經たぬに、貧民學校をば小石川水道端二丁目四十七番地と云ふに設け玉ひぬ。其始めガイ氏が學校に程よき家もがなと云はるゝに、吾はガイ氏と共にあちらこちらと尋ねたりしに、さる程よき家のありければ、これなん恰好したらめと校舍を其處に定めぬ。さて吾等は次に何をなせしぞ、吾等はかしこ、こゝの家々を訪づれて、此頃何がしの處に貧民學校を設けて家貧しく、兒を敎ゆるに由なき人あらば、喜びて其兒女を迎ふる由をば告ぐ、ある家にては其基督敎の敎を主義とせるを聞きて、吾等はさる學校には兒女を托せじと嘲る如くに云ふ。そはともあれ吾等は種々の校則など取定めやがて開校の式をも終りぬ。開校の日となりて此處に來り學ばんとする者僅かに拾貳名のみ。

吾此年となりて未だ敎育と云ふとの經驗とては更になく、學は元より淺き身なれば、如何にして生徒を敎へ導くべきかなど、心も心ならで只管すら夢の心地せられて。日ごと〳〵に此の貧しき學校に行きては、いろはにほへとと敎ゆるに兒女等ははやくも師よ〳〵と吾に親みぬ。今ははや吾身も人の師とはなりけるよと心おかしく思ふ事もあり。惡戯兒の互に言ひ募りて相爭ふを見ては、これぞ小兒の常せん方もなしと思へど殊更ら叱りこらし、いやしき語、野卑なる戯をなすを見ては、まづしき家に育ちたるものゝせん樣もなしと獨り歎す。頭は櫛しけづらず、首の廻りにあかつき、目瞼にはやに殘り、鼻下は汚れ黒みて、見るさへ物憂きほどなれど、若しこれだに我兒なりせばいかばかりか可愛からんこれ等三十人ばかりのあはれに育ち、社會に顧られざる者等も、一人の男

兒一人の女性、此等兩者がこまやかなる愛情の中に出來にし可愛の撫子なり。されど其撫子をしもうるはしく生立たせ、やさしき花をさかせん事をも得せぬ、かれ等多くの夫等と妻等とは、いたづらに兒をば生みけるよと、心浮き立ちては沈み、沈みては又浮き來る、吾が今日の心、ア、吾今日のつとめばかり趣あるものまたいづこにかある。そはともあれ、吾れ今まで此に是等多くの兒女を守りてあらんには、後の世となりてかれが櫻と咲いづるも梅と匂ひいづるも皆其間には多かれ少なかれ吾がせしつとめの程も見ゆべきものをと思へば、吾學校のつとめも今は此上なき樂となり。かれ等の遊び無邪氣に戯れ其他凡てかれ等がなす事々に付け又はかれ等がさゝめき笑ふを見て、吾知らすほゝゑむ事のあるも宜ならずや。凡そ師を師と思ひ生徒を生徒と思ひ、學校を學校と思ひ、貧民を貧民と思へと云ふは世の常なり吾以爲らく此事あしゝ思はずもがな、思へがし、否〳〵思へかしと思ふは倘非なり思はず、また思へかしと思はぬ内に思はんこそいとよからん、知らんとして知るは非なり、知らんとせずとも、自ら知る之人の心の發達にあらずや、吾れ此事に從ひてより已に一年ア、吾は天に謝すと共にあはれなる兒等に謝す、吾は此一年の間如何に得難き財寶を得たりとするぞ！今の啓蒙學舍の名は吾れ此に行きてしばし後生れつ。よそにはよき校舍の新に建てられて、器械の類ほどよくそなはれる學校もあらん、されど憐むべし、これは門破れ屛將に倒れんとす、それのみかは、内には疊破れ、机碎け、凡ての事いたく憐れなる事のみなる中に、吾と兒女等とは啻只すら其日の學に急がしきのみ。時には砂をまき木を倒せる風の爲に屛の倒るゝ事あり兒等は是を見て師よ屛の倒れてあるにと高聲して呼ぶとあり。校舍を守れる車夫なる人の妻出で來りて、往來の邪魔にやならんと倒れたる屛をは自ら引起しつ其日を過せしこともあり。さきの、地震の時にも、校舍はいたく震ひ動きて、危く倒れんとしゝが、事なくして今日に至るまで忍び得しこそ、吾がさちなりけれ。男女の兒等打ちまざりて戯る時は、家も崩れんやと思ふまでに噪しき事あり車夫なる主人の家にあるときは吾はそれとなく吾が行屆かざる程をば謝して、其寛容を乞ふ事あり。かく計り喧しく噪しき時にも吾はそれをばつらしと耳には聞かず、いかほどにもあれかれ等が爲さんほど聊

れしめよ、嬉戯はかれ等の生命なれば。されど吾容さじと思ふ程は如何なる事とも、吾れは之を責めて容さず、今日に及びて、吾校舎を退かしめたる者二人三人までありき。

多くの兒女の其性さまぐ\に異なれるぞあやしき思せらるれ吾算術をばかれ等に敎へたるとき、或る一人の兒にこれ知りやと吾れ問へば、かれは其様いと驕慢げに、我は知らずと答へて愧色なきのみかは、かたへを向き嘯くが如き様なり、そも小兒は凡て知れるを自ら喜び、知らざるを人に對して耻らふ者なるに、かれはた如何なる心を持てるにか、さながら學校にありて學校にあるといふことを知らぬが如し。さても面白き兒もあるものか、中に一人の小女あり、容姿温かに、心ざまいとやさし、成長の後、時と處とを得ば馨しき名をや殘さん。またいと心強き一人の小女あり、または昔話にいひ傳へたる孝女といふべき者あり、無心に遊び、無心に學べる、蝶の如き小女あり、其他男々しきあり、また熱心なるあり。各々其長處を異にせり。かれ等各々其長けたるところ、勝れたるところに其心を注げば、皆名ある人とやならん、神の喜び玉ふものとやならん。人種々の世に、小兒にしてはや其心

皆各異れり、かくも異なれるかれ等各其長けたる方に向ひて成生ち行く様を見ことのいかに樂と思ぞ、世の師たる人の樂みこゝにあり、ア、世の師たる人の樂實に玆にあり。

今や學校はあれども、數多の兒等は集へども、やがて此地を去らん身の、心は此處に殘ども、吾身は遂に此處にあらず。されど蒔きし種のなどか生へざる事のあるべき、行末は只すら大神の御手に托せて、成るがまゝにならなん、心は神の上にあれば、此世の煩ひ如何に辛くとも、吾心たのし、斯くしてかれ等幾多の兒女等が將來如何にと見ば、吾心たのしきが上にたのしからん。

情念

長汀生

己の理性に照して、己が情念の働きを見るときには、おろかしき業、笑ふべき事のいと多きこそ、をかしけれと思にも、なほ其のをかしきを爲すに滿足するぞ、必ずしも心の弱きが故にはあらじ。如斯きは曾ては人の上に笑ひし、この頑な

の心の、今更となりては、また誰人にか笑はれぬべき振舞もあるべけれ。さなり自らさへ理性にはおろかしさよ、可笑しさよと覺るものあるものを、己といふ私の上よりならんにはいかでこの歪けたる心の、他のをかしき業には、兎すればいりけん、この道には、必ずや入らじとぞ、竊に誓ひにしも、かく智慧なきしれ者が、世の爲と、、、、おほけなき事を思ひ寄り、ならはぬ身に落ちかゝりにし、我からの苦しみを、人に迄おほせぬる事の罪の恐しさ。さるにても義理てふ事のなき世なりせば、ともかくもなれ、義理てふ柵に、更に情念の鎖かけられ、かゝる業には誰人かはいたく喜びもせめ、人の上より、幸福安泰の途を奪ひたるにてはなきかと考ふれば、其罪ならぬに、この不遇非運に、我故陷らしめしその爲に、心苦しさ、いとゞしきに、さても義理の故を思へばか、情念のやみ難きものあり。而も我を思ふ人の情念を顧みれば、理性のをかしと見るとも、情性は滿足して行ふぞわりなしや、わりなしといへど、我も思しよりは情念に脆きとかな、この義理の生じたる情念より離るべきの術を知らざるなり。義理と情念と、相衝突すればさても世に痛ましき悲劇となるとなれど、さては亦この二つの者が相分ち難くなれる故ならでやは。念々に衝突え、念々に融和す、をかしきは義理と情念との相逢ふ時なるかな。

人？悪魔？（其一）

青柳有美

聖きドヽナのオレークルにも非ず、春日社の梓巫女にもあらねど、思ひ出るまゝ筆の動くにまかせて、いざや、わがうちに寓る『人』の靈の默示す所を宣り出さなん。されば、人あり、これ世界を呪ふ悪魔の大王ベルゼブルの毒烟なりといふもわれは懼るゝ所に非ず。

○剽竊を罵る人

剽竊とは賤しきことならん。然り賤しきことならん。是に於て人は罵り勇んで曰ふ。彼は剽竊せり、某の文を盗んでなにがし雜誌に賣れり。文界之より大なるの不德なしと。然れどもつら〳〵觀すれば、天下の人は悉これ剽竊に誇り、剽竊に生るもの、大學の學者先生、カントとスペンサーとを丸る

めて其講義を作り其思想を固め、文士、西鶴とマコーレーと近松とシエークスピーヤとを綴り合はせて文をなし思ひを構ふ。道家は、古哲の擧動に鑑みて己を正うし、小兒は、外界に眞似て人類の進化と社會の發育とを助く。何れか剽竊ならざらん、否な寧ろその最もなるものなり。嗚呼、剽竊を罵るの人、深夜人定るの時、深く顧みて自ら慚死するなくんば幸なり。

○告某子書

家の竈は、快樂の宿る所慰めのひそむ塲所たるべきは、當然の理りなり。故にホームに入るものは、凡ての痛苦を忘れ其涙をぬぐはるゝを得べけん。されど入りて益々苦みを増し、歎きを重ね、宛然針の莚に坐するの思ひあること、上なきの恨事なるらむ。殊に家君が學事を廢せしめんとせらるゝ如き、いたはしきの極みなり。「今や泣くために歸るといふ胸中眞に察するに堪へず。誹る人多くして談る人なき境涯果して如何ならん。かゝればとて己が憂悶を秘めおくは宜きことに非ず、これ人をして狂はしめ、身を損ふに至らしむるの基なり。情激して忍ぶ能はずば、憚る所なく先づ泣くべし、瀑なす涙を流して泣くべし、涙の力や實に靈妙にしてよく胸中の鬱氣を拂ふ。次に祈るべし、友を呼び母にすがるが如く聲を限りに祈るべし、父必ず慰師を送り給はん。次に書を認めて之を親しき友に送るべし。この三つのもの、これ、知る人なき里にありて自ら持するの道なり、徒に身を制して忍はんとするが如きは病を導き、精神上自殺を招くの所因に外ならず。」人もし嫁げよと勸むるあらば、己が齢の未だ成熟期に達せざるを恐るゝ勿れ、斷然學事を續くるの念慮を絶ちて、われに同情ある人を撰み之にゆくべし。これ密室に閉息して涙にその日を送るにまさること千萬、またよく心中平を得るの手段ならんかな。

○忍が岡演奏會

「何々は仲々の難曲なれど難なく奏せられたるところ、感服の外なし。然し何より何に遷るところ、少し急激なりしなどいふこと、これ音樂批評家の常なれど、我れには此の巧者の智慧なし◉作者得意のためか、將又喝采沸くが如かりしためか、

五月卅日の學友會演奏會に出だされたる、鳥居忱氏作歌の『薩摩潟』、七月廿四日の嘯災義捐の會にも唱せられたれど、我れは其寧ろ旗野十一郎氏作歌にかゝる『士氣の歌』『義勇』の二者に遜色あるを覺ゆ。かの『小舟艤ひ英雄が……以下……舟は輕し薩摩潟』までと『あはれ悲し英雄が……以下……沈みけりな薩摩潟』までとの二節は、歌詞と歌曲との調和未だ熟せざるものゝ如く聞れぬ。加ふるに、『今や天下の正義の士と『羣もあやに詩を吟じて』の二句に於ける『人』の音頗る不快の印象を耳底に與へたるが如し。われ斯の道の學者にあらねばよくは知らねど、邦語中の『ん』音は、音樂上ミーターとかいふものより、深き研究を要するものには非る乎。ミーター上、帶には短し襷には長しとは此る音のことならざらんか。旗野氏作歌の『士氣の歌』は、その歌詞と歌曲の勢と調和せる點に於て、完全無欠ともいふべく、『義勇』の如きも又結句なる『勇なきのみ』の『勇』の音意と之に合する調の意との少く齟齬し居るを正さば、餘は申分なかるべき乎。『湖上』、詩人ゲーテを呼ぶところまた痛絶。中村秋香氏作歌『夢の世』『廢宅』の如き、常に人に袖しぼらしむれど、鳥居氏の如き未だ詞曲の調和完からざる所あるが如し◉學友會に於けるウ井オリン合奏は、演奏者諸氏が幸田女史の精神を受けミューズのインスピレーションを吸ふに至りしためか、是までに見ざるの生氣を呈し弓にも力いりて目出たかりき◉その道の人は如何に許するかは知らねど、ピヤノの四人連彈を聽く毎に、餘人に優れて生氣に富み樂道に足蹈み入れ居る人の如く思ふは由比嬢なり。女史益々乞ふ奮て身を樂道の祭壇にいたせ。◉氣づかはしきものは、遠山女史の健康なり。若し今にして大に玆に注意する處なくんば、慮らざるの災その身に來り、美神之がために泣き、我が樂界その明星を失ふに至らん。聞く、女史は幸田女史のウ井オリンと共に、ピヤノを以て並び稱せらるゝの人なりと。乞ふ必ず斯道のために自愛せられよ◉要するに、學友會演奏會は樂器よりも唱歌を以て寧ろ成効したるものゝ如く、何れの唱歌も上出來の如かりき。之に反し、嘯災義捐音樂會は、その名の美なるにも似で、一は當日空模樣の面白からざりしと、來衆の少かりしとにもよるべけれど、餘り面白しとも申されず。器樂の曲目さへ多くは單調のものゝみにて、『薩摩潟』の如きも、前會よりは聞き劣りせられたりき◉例の

蠻に叫たる粗野漢の口まかせなれど、樂を熱愛するの衷心より出でたるもの、まさか加藤博士の宗敎論の如きにも非るべしと信ず。

○結婚前後の奇象

玆に男子あり、一婦人を熱愛して之と婚を結ばんとせば、低頭平身、偏にその意を迎へ、戰々競々としてそのいふ所に逆はざらんことをこれ勉め、之が歡心を買ふに急はしく、見る人その意氣地なきを笑ふ、然れども結婚は魔術師の妖杖の如く、夫と呼ばれ妻と呼るに至れば、昔意を迎へられたるの婦人は、俄に變じて意を迎ふるものとなり、夫束髮よしと曰へば、島田を變へて束髮となし、夫束髮妙ならずと澁み給へば、銀杏反へしを頂いて紅白粉の調度に急はしく、己の意志なるもの定見なるもの、一もあるなく、たゞに夫のまに〱に動かさるゝ風車の如かるに至る。嗚呼何等の變象ぞやされどつら〱之を考ふるに、このこと一の所因なきにも非ざるべし。さきに、男子が婦人の隷僕たりしの觀ありしは、これ男子の意婦人を得んとするにあるより、婦人はこの時に當りて所謂強者の位置にあり、弱味自ら男子に存したりしが故なり。されど結婚は、婦人をして其一生を男子に托して送らざるべからざるものたらしむるより、是まで婦人が手に歸せし強者の權利は遷りて男子に至り、己れ身を以て男子の意を迎ふるに至る、實に自然の勢なり。故に以爲らく、パッシーブのもの常にアクティーブのものに事ふと。資本と勞力との關係に於て然り君民の關係に於て然り、主從の關係に於て然り、豈に獨り男女の關係のみと言はんや。

○釋尊と父帝

われ近頃一生と共に『亞細亞の光』を讀む。悉達、山に遁れ野を渉り。肉を枯らし血を渴して道を修ること玆に數年、遂に家に歸る。時に父帝淨飯王、己が子の黃衣剃髮して町に入り、食を賤民に乞ひつゝあるを、聽き、怒氣禁ずる能はず三たび地に唾して馬に跨り、出でゝ世尊を途に擁し大に之を責む。悉達悠々諄々道を說き、其の大慈大悲の御顏は朝日の光に浴せるロータスの花の如く、いふべからざるの光輝に充てり。父帝遂に之に打たれて言葉なく、自ら愛子の前に跪き其衣

の裾に觸はりて曰ふ、「子よ、オー我をして爾の群のいと少さき一人たるを許るせ」と、直に佛道に歸依す。われ不幸にして○とあはず、わが言ふ處常に其の退くる所となり、わが行ふ所往々にして悦ばれず。然れども今や思ふ、われに世尊の徳あり、われに世尊の眞心あらば、○君何ぞ動かざるの理あらんや。その動かざるはこの徳なくこの心なく徒に反動の勢にかられて行ふがためのみ。あゝ願くは吾れ人共に世尊に、就て學ぶ處あらんと。

○エドウ井ン、アーノルド

『亞細亞の光』一篇讀み去りて知り得たるもの、たゞ著者アーノルドが凡詩人たり俗詩人たるのことのみ。彼はよく當代の女主ヴ井クトリヤの徳をたゝふるの凡俗詩人たるを得べけん。されど世尊を歌ふに至つては未だし。その思ひしかく麗潔ならず、其の筆しかく圓熟したりといふべからず。その天然を寫す所はロングフエローの半ばに如かじ、素よりバイロン、ウオーズウオースの深き所あるなし。たゞ僅に秀でたるものありとせば、婦人風貌の美を描くの一事ならんかな。われの何故に此るものゝ世に嘖々たるかを怪む。そのたゞ世尊の名あるが故のみに非ずや、アーノルド彼れも亦人の褌に角力をとるの類乎。

○戀を汚すもの（文學第一號）

戀の小兒の心に宿らずして、春氣發動期に及んで著く發顯するものあるを見、戀を肉につけるものなりといふは、これなほ、智力が此期に於て急速の進歩をなすを知り、智は肉につけるものなりといふの愚に同じ。戀豈にかゝる肉感的のものならんや。我が邦古來情死なるものあり。戀もし肉感のためならば何ぞ戀して死するの要あらんや。寸陰の生をも貪りて肉感を滿足せしむるの時を長ふするを勉むべきなり。戀情と色情とは其差眞に雲淵もたゞならず。ダンテは八歳にして猶ほビアトリチエを戀ひその嫁せるのちも之を續け、身を終ふるまでに至れりと聞く。世に又見ぬ戀といふものあり。論者果して如何の解釋を之等に與へんとはする??『文學』第一號葦涯なるもの新體詩『戀』をのす。實に以て傍若無人の文字なり。われ美神の顏を汚されたること多きを思ひ、聖戀擁護の

爲め辯ずると此の如し。あゝ！これら『人情の神を探る』能はざるものに戀を歌はんとするは、なほアーノルドが世尊を歌へるよりも、その身にふさはしからぬとなり。

案山子廼舍諸社中詠草（其三）

池袋清風大人斧正評點

大阪第一社

兼題

春雨　　今村幸子

、さきにほふ梅津の里の夕まぐれかすみながらに春雨ぞふる

垣田廉

、八重がすみ空たちこもる夕月の雨になりゆく花のころかな

評　春月朧々の景雨氣を帶びながら目前に浮ぶ

永井鶴子

、春雨のなごりの露もかつちりておぼろ月夜になりにける哉

評　春雨の題にてはいかゞ雨後春月か

夏簾　　堤鉦太郎

、篠簾まきみおろしみ見つる哉あまりにあつき夏の日なれば

評　見つる哉にては樂んで夏の簾を眺むるやう也

池袋節子

、やり水の音もたえざる宿なるにかけたるをすの色の涼しさ

評　此所なるにさいふべき詮もなし

大畠榮子

、あきつむし飛かふさまも見ゆるかな田中の稚のなすのひまより

評　あきつは夏も居れど多くは秋の初に飛ぶもの也されば夏の心うすし

點者はかくよまん

我門の穗なみの上の霧はれてあさ日の影にあきつとぶ也

新竹　　池袋節子

、ますぐにものびはしたれど若竹のよの浮節はのがれざる覧

大畠榮子

、竹の子ははやくも竹となりにけりいつまで人の幼かるらん

窓前新竹　　永井鶴子

、若竹のまき葉にそよぐ風見えてすゞしき窓に琴の音ぞする

評　卷葉には風の音もせざるべし又見えてといふ時はさまでそよがぬ時なるべし

窓納涼　　垣田廉

、千町田を見はたす窓によむ書の紙ひるがへす風のすゞしさ

舟中納涼　　永井鶴子

〻須磨の浦夏（明石がた）をはするゝ（はなれし）我（ばた）舟に月もやどりて夜は更にけり

評　須磨の浦夏とはつかず足利時代なら必浦やといふべし宜しからず又舟にうつるべき餘波跡もなくして月の宿るとはいかゞにや

折にふれて　　大畠榮子

〻何事もなさで過ぬるくやしさよ（にし我身かな）なさばなすべき折も有しに（を）

評　第三句かくむきだしにいひては品格おつる也

布袋和尙袋を負ひて川を渡るかたに　　永井鶴子

〻世を捨し身にも實をすてかねてうき世の川をなぞ（何はた）たどる覽

評　世ふたつあれど

舟中納凉　　今村幸子

〻水雞なく里の（夕立のすぎし堀江）小川に舟さして月まつ夜半（よひ）の風の凉しさ

評　水雞は梅雨前が固有の時節也其頃まではうちまかせて凉しさもいはれぬやう也充分に凉しさといふは梅雨後也又夜中にてはあまりおそし

時　文

○軍事滑稽 發明家　　上野錢八郎著　　春陽堂版

春日野二なる青年發明家が千辛万苦、義人俠者の力に藉して軍事上の大發明をなしたるといふ筋の小說なり。

○世界將來之海王　　內田澤陽譯述　　春陽堂版

露國海軍士官某の原著英人クークの翻譯より重譯したる海事小說なり。寓意の存する處、英國の手よりして海上の覇權を奪略せんが爲に、露國政府に海軍擴張を促かし、其軍人社會に激論の氣象を慣興せしめんとするものなり。時節柄此種の小說は一應の好讀を博するならん。

○日清陸戰史　　川崎紫山著　　春陽堂版

日清戰爭陸戰の大軍史、綴せられて、紫山の健筆に上る。以て士氣の漢興するに足らん乎。曩きの日清海戰史と並び行はれて、聲響ある日清戰爭を傳ふると其完きを傳ふるに庶幾らん。

○日清戰爭繪卷　　第九　旅順の卷　　春陽堂版

美麗なる繪卷、夢と過ぎにし旅順の快戰を描き留めて、如今の感慨轉々切なるものならしむ。

七月中女學論題一斑

基督教女學校に對する世の非難を非難す……………同志教育第二十一號
英國大學と女學生………………………………………心海第三十四號
ニウヨルク市の牧師會附婦人會…………………………護教第三百五十八號
晉讓の諸氏何が故に女子傳道に務めざる乎(田中泥牛)…………………………
…………………………………………………………密嚴教報第百六十二、三號
國家の興亡は女子に關する論(文學士宮本正貫)…大日本婦人教育會雜誌第八十四號
節操は國の精神(坂正臣)………………………………同　　上
少壯婦人の精神病(榊博士)……………………………禁酒界第十四號
女子教育再び盛ならんとす……………………………花の園生第六十五號

小學校女教員の注意すべき要點……………………教育報知五百十七號
小學校女生徒さ英語……………………………同
女生徒を教育すべき者（清水直茂）……………教育報知第五百十八號
血統國の本色漸く失はるゝの傾あり…………同
女子教育の方針…………………………………國民新聞七月一日
婦人の再婚（福翁百話）………………………時事新報七月十二日
早婚必ずしも害あるに非ず（全上）……………同七月十九日
女子體育に關する實歷上の實見（河原一郎）……京都府教育會雜誌第五十號
女子教育一斑（三輪田眞佐子）………………女舘第百十二號
好色國……………………………………………國民の友第三百五號
佛國無政府黨の女傑ルイ、ミセール…………同上
女子の職業（毛糸織物○ハンケチの刺繡○刺繡の内職）……報知新聞
孤女學院…………………………………………同自七月十一日至十七日
家庭雜誌○妻に對する稱呼……………………早稻田文學第十四號
女子教育に對する希望（古在豐子）…………太陽第十四號
再び女子教育につきて…………………………太陽第十五號
女子の結婚に關する裏面の觀察………………同

片　玉

◉佛教界の女學論　密嚴教報の田中泥牛氏佛黨の女子傳道に務めざるべからざるを論じ、女子傳道勞少くして、其の功甚だ大、古來佛教家は甚だ子女に對する不親切に、飽までかの腐儒輩の肾馬に乘りて、女子を排斥するの傾を有せりそも何等の事ぞや。佛教の根本的眞意には決して婦女擯斥の義なし。佛教女界の振はざる實に嘆ずべしさいへり。風雲は佛教界をして多くの女學論を呈出せしめんさしつゝあるなり。

◉榊博士婦女の　精神病を妨ぐ方法の一さして曰く「モウ一ツ大切なる事は婦人は配偶を得るさきに、配當の財產を授くるは、至極必要の事さ思ふ」さ。

◉教育報知の　某氏曰く一學校を負擔すべき程の優良なる教育家をば余輩は之を男教員に望まんさす。これを女教員に望むは天理に背くべきを以てなりさ。天理さは生殖上大任を有する女子なれば、男子に比して學力低かるべく、識見高からざるべきの事なりさか。

◉小學女生徒の英語　は讀本を廢して日々の見聞に就て名詞位を敎ふれば足れり、讀本の如きは高等女學校より始むるを以て可なりさするは教育報知記者の意見なり。

◉京都府高等女學校々長　河原一郎氏曰ふ躰操作法唱歌裁縫の四科目は互に相運絡せるものなれば之を分たば不便多しさ。

◉時事新報　の義捐金は、概實業家の囊より出て、日々新聞の義捐金は概官吏の囊より出で、都新聞の義捐金は、多くは中等社會以下の財布より出づさ。

◉國民新聞　女子教育の方針の要は今日の社會旣に東西兩文明の雜居兩立する所なれば、女子教育の如きも亦當方は東西兩樣の教育を兩立せしむるより外に致方なしさいふなり。

◉米國婦人の地位　婦人の地位の最も高くして最も有力なるは世界中米國を措て他に其例を見ざる所なるが近着の米國新聞によれば同國カンサス州に於ては其の勢力殊に非常なるものにして目下市廳其の他敎育會等の事務員に選擧せられたるもの鮮なからず現に同州ゲーロード市に在てはハスケル婦人之れが市長さなり之れを統治し且つ婦人にして同市書記たるもの一人市行政裁判官一名市會議員五名は皆婦々たる婦女にして多は良人兒女を有し市長ハスケル婦人は銀行者の妻さして二男を有せり而して殊に面白きは同市の制度さして此等諸員は皆選擧によりて任命するを以て其の選擧の日に當てや競爭甚だしく同市行政裁判官フート夫人は其良夫さ激烈なる競爭の結果現職を得しが如く其の婦人の勢力如何を見るに足るべし又エルリス市の如きは從來惡徒無賴漢其他賭徒牧畜民の巢窟にして常に飮酒喧嘩を事させる暴民多く兵士の屯營所を要し從來難治を以て稱せられたりしが曩に同市長選擧の時に於いては激しき競爭の結果同市長も亦た婦人の手に落ちウエイド婦人は此の榮職に上り爾來屈勉市務を執り今や流石の難市も至末の騷亂鬪爭なく無事に治安を保ちつゝありさ云ふ而して此等の風流市廳に於ては行政事務全く經濟的に出で一厘たりさも濫費を出すが如き憂ひなきは全く婦人の行政官たるによりさ（東京新聞）

◉勝海舟伯　海嘯を咏じて曰く「父母よ我いさし子よ我妻さ呼べど敎ふ神もなき世や。

◉富山縣の　女書生新演劇を組織し、部下の巾幗輩に應ずるもの甚だ多しさ傳ふ、これ男にしては川上の向ふを張らんさするものか。

◎小兒預所　新渡戶稻造君、勞働者の爲に子供預所を設置すると、慈善界の要務となすとを論ず。孤兒院養育院と共に勞働者小兒保育所の設置や、社會改良問題上甚だ必要の事なり。仁人之を發起するとなるべし、政府之を保護するとあるべし、會社はまた其使役する勞働者の爲に之を設くべきなり。

◎好色圖　民友記者日本圖を稱するに好色圖の名を以てす。君子國か好色國かザルクも耻ちなくして社會の上位に立ち得る、その公衆情義の制裁なき國、好色國の名譽に不當ならずとせんや、記者今にしてこれをいふもの、何ぞ意なからんや。折柄相公吉野に花を賞しつゝ、高砂に遊ぶと謳傳するものあり。

◎故植木枝森氏　曰く女子に敎育するとは田に肥しをするが如し、田に肥しをなすれば、莠も蔓れども、稻を易ぜしむると更に大なるものなりと。

◎婦人雜誌評　早稻田文學各婦人雜誌を評定して曰く「女學講義」はよろづ上品にして、中以上の家庭に讀まるべく、『日本の家庭』は寧ろ中層以下の都鄙一般の家庭の伴侶たるべく、「家庭雜誌」はたとへば女學生あがりの細君が寄る家庭に喜ばるゝを得んか。「なでしこ」は打見たる所「女學講義」と「日本の家庭」との仲間を行くものゝ如し。「花の園生」は法話などある外全く雜誌的にして、趣意は通俗にありと見ゆれど、稍に過ぎる論說文章もあり。「裏錦」は基督敎信者の上等の家庭に入るべきもの、西洋趣味に富み、兼れて文學雜誌の片かげをも留めたり「女學雜誌」は云々（別項に見ゆ）

◎而して　同雜誌は曰く今の家庭雜誌の弊は、其の動ともすれば高尙に失し、乾燥に流れ、偏狹に陷るにあり、又は事平凡に過ぎて言辭猥り供儷に流れ、意と言と相副はざるに在りと。言盡し頗る其當を得たらん歟。

◎本誌前號　に揭げる現存婦人雜誌中に『裏錦』『婦女之友』の二種を脫したり。愛に補記す。

◎各府縣將來の學事施設　最近數年の一府九縣中女兒就學の督促を必要すといへるものは宮城、茨城、岐阜、廣島、福井にて女子敎育を獎勵して其進步を圖るとを必要とすといへるものを島取とす。

時報

◉華族女學校行啓

皇后陛下には去る十八日午后九時御出門華族女學校行啓仰せ被出第十一年度卒業式御順序被遊れたり

◉皇太后宮の御救恤

今般三陸地方海嘯被害の趣　皇太后陛下に於て聞召され、岩手縣へ金二千圓、宮城縣へ金七百圓、青森縣へ金三百圓を下賜せらる。

◉各女學校の卒業式

華族女學校は七月十八日、東京女學院は六月卅日、東京女子獨立女學校は七月三日、東京立敎女學校は同十四日、橫濱共立女學校は七月二日、橫濱英和女學校は、同五日神戶女學院にては六月二十五日、仙臺宮城女學校にては、同廿七日、函館北星女學校にては六月廿日、靜岡女學校は、七月四日。

◉高等女學校へ御下賜金

東京府高等女學校は本年二月校舍燒失後神田今川小路專修學校を借り受け授業中曩に小松宮御息所殿下より御用邸建物を寄附せられたるを以て之を基礎とし神田橋外に校舍の建築に着手したるところ今回落成に付き十九日午前九時開校式擧行の由なるが皇后陛下には此擧を聞食され左の通り金二百圓下賜相成りたりと云ふ

東　京　府

其府高等女學校建築落成開校式擧行の趣皇后陛下被聞食金二百圓下賜候事

明治廿九年七月十七日　宮　內　省

◎共立山梨女學校　去五月中旬當市錦町師範學校南側に假敎場を設けて開業したる共立山梨女學校は職員の盡力に依りて生徒漸次增加し目下三十名に近し併し創設以來全く二ヶ月を經ざることなれば同校設立の存汎く郡部へ聞へず爲めに市部の生徒のみ多く郡部は極めて少なし又た暑季休業は師範學校の女子部同樣にするよしなれども一日三時間の課業は終始廢止せず同休業後に至れば更らに生徒募集の運びなりといふ。

◎佛敎主義看病婦學校　大阪に綜藝種智院を立てゝ、專ら女子の敎育に從事せる眞言宗の僧侶佐伯覺燈氏は、此程また一の看病婦學校設立の計畫をなし、近日開校の運びに至らんとす。

◎女劍客の企　大阪府の松本愛子なる婦人は素と劍客の家に生れ維新後は專ら東京深川にて劍道指南に世を送りしが今回大日本婦人義勇會を組織し一百万圓の軍

艦を製造するの資を献金せんとの趣旨にて百万人の義捐者を募り月々一錢宛の集金をなし以て其志望を貫かんとて此程警視廳へ出願せしが此程認可相成難き旨指令ありたりとぞ。

◉諸婦人會の運動

●衣服二千點の發送　過日婦人衞生會にては三陸海嘯被害地災民救濟の爲め豫て會員諸氏より寄贈したる金圓を以て更に衣服を新調し曩に寄贈の衣類と合し總計二千枚を被害地へ發送したりと云ふ。

●岩手縣福岡町婦人の救恤義捐會　二戸郡福岡尋常小學校女教員堀内ツ子子及び福岡婦人會員發企となり同町内の婦人諸姉の贊同を得て過般來より今回の海嘯罹災者救恤金を醵集し義捐出願の手續きに及びたる金額は巳に數千金に及び尙ほ續々醵出中なる由。

●福島婦人會の慈善市　福島鳳鳴會婦人會友の發起に係る慈善市は本月四五兩日間西裡廐善寺構内に行はるゝものにして時間は兩日共午前十時より午後五時迄なりと云ふ因に兩日間午後一時より鳳鳴會事務所にて追吊大法會を修行する由。

●婦人會員の義捐　昨年九月富山縣高等官令婦人の發起に係る富山縣婦人會は目下會員百二十名の多きに及びし由なるが同會の目的は弘く慈善を行ひ且つ婦人に必要なる家庭教育を研究する爲め毎月第二の土曜日を以て師範學校内に集會せるが今度三陸海嘯被害者救助として會員中義捐金を募り夫々義捐せしよし。

●防長婦人相愛會第五回總集會略況　六月廿七日防長婦人相愛會の第五回總集會を德山德應寺本堂にて開會し。講話演說等ありまた其節三陸地方海嘯救災金貳拾圓醵出することを議決したりといふ。

●婦人農談會　愛知縣小鹽津婦農會に於て本月一日午後四時より婦人農會を開きしに來聽婦人二百餘名。

●高知婦人衞生會　は又七月十一日其親睦會を開きたりといふ。

◎善行表彰

愛知縣尾張國中島郡奥町
野田させ

資性誠實、幼より渡邊庄三郎の家に傭はれ能く其二兒を保育し、庄三郎沒後家道、漸く衰ふるに當り、幼主を助け、織造を起業し、經營管理、其宜きを得て資產先世に倍蓰するに至れり、當主其忠實を嘉し、悉く家政を委れ、之を母視す、然れども敢て主從の禮を失はず、錢帑毫も私畜せす、一意主家に竭す、四十年の久しき、一日の如し洵に奇特とす、仍て明治十四年十二月七日、勅定の綠授褒賞を賜ひ其善行を表彰す、

◎報知新聞社の孤兒救濟　三陸海嘯災害の爲各新聞社孰も義捐金募集に從事するが中に、報知新聞は特に義金を募集して孤兒を救濟し、其養方を福田會育兒院及び孤女學院に附托せんとす。美事といふべし。

◎第三回聯合救世婦人大會　新佛教救世教聯合婦人大會は去月廿八日東京に於て開會せられたり。

◎臺灣女界最近報　時事新報の通信によりてまたこれをきくに臺北にて城內の多くは日本店と爲り島民も自然日本風に化して艋舺の如きは恰も神田邊に於ける鍋酒屋同樣の飲食店多く城內に日本婦人の渡航者二千餘にも及びしため夜に至りて紅燈綺羅星の如く五發三條人の往來絕えず樓上に歐舞を弄する艷麗の聲妙なるあれば樓下に千客萬來を望む柳腰の影幽かなるあり是に於て乎男は出でゝ外を務め女は入て內を守る閉門的臺灣婦人も忽ち感化して纖々たる初月白日街頭に現はれ暮に及んで蓮華步々艷を競ひ容を爭ふて日本婦人に讓らざるものありとなり新竹苗栗等にも次第に此種の飲食店增加し來り臺中縣には既に二十餘名の日本婦人入り込みたりと。

明治廿九年度全國各女學校卒業生人名表（其三）

四月分

○東京共立女子職業學校卒業生百〇九人

乙科裁縫科
久米井てい　松林たけ　中村よし　伊藤こう　市川ます　山田ちか
井上まつ　內野はる　三原さだ　福岡ひさよ　中出やほ　小野寺てつ
新井りう　鈴木なか　中村つや　志野しづ　安達やす　齋藤しく
菊地よし　海老澤みえ　田中たれ　永島すゞ　森田もと　渡邊もと
山崎はる　稻垣きよ　宮川ふみ　田中きく　河西ちよ　田中さだ
石井くら
乙科刺繡科
高橋いま　眞山きよ　鹽田みよ　宮部れい
甲科造花科
松本やす　飯盛ちよ　北村ゆき　野口にと　高科たと
羽柴ろく　津川くめ

乙科造花科 金澤 よし 三好 こう 推川 みよ 藤田 しん 黒木 すみ
水原 さき 上田 てう
乙科編物科 金澤 よし
乙科圖畫科 岡 さく 松井 けい
甲科裁縫科 羽金 かよ 沖 松代 原藤 せい 山崎 まし 島田 ひさ
鈴木 こさ 宮崎 くめ 寺島いつえ 飯盛 ちよ 高橋 しげ 石川 こう
後閑 うの 西木ゆきの 兒玉 くら 西村 すぎ 木村 なか 八戸まつみ
野口 こさ 石川 けい 永井 はる 由布 さり 内山 すみ 市岡 りう
加藤 なほ 芳賀 いち 佐々木はるえ 安原 ひさ 藤代おさめ 朝倉 りせ
甲科刺繡科 羽金 いよ 宮崎 くめ 沖 まつ代 石川 こう 石川 けい
高田 ひさ 鈴木 こさ 北村 ゆき 高橋 しげ 木村 なか 登山 たち
津川 うめ 中川 きん 八戸まつみ 佐々木春枝 加藤 なな 藤本ゆきの
内山 すみ 藤代おさめ 長岡 しげ 永井 はる 竹田 てう 朝倉 りせ
西村 すぎ
甲科編物科 高科 こさ 原藤 せい 兒玉 くら 上野 ふく

○東京靜脩女學校卒業生九人

高等科 中村 たけ 東 ふく 香坂 きく
普通科 永野 さく 諏訪 やへ 塩原 よし 高原 さみ 石川 くめ
關 こさ

六、七月分

○華族女學校卒業生十人

全科生 星野 つれ 辻村 たへ 井上 若菜 古莊 きよ 相良 貞
三島 つる 土方 玉 森 乙女
別科生 田島 秀 秋月 順

○東京女子學院卒業生二十人(兼修生を除く)

全　科 園田 まき 布施 よし 水上 よし 竹中 しげ 十時 きく
高等日本學科 古久保文枝 大森 きみ 瀧田 松江 津田 ゆき
中學科(本科) 磯部 しづ 増田 ゆき (日本科) 原 榮 西 しげ
登坂 かの 須藤 みや 手島 なか
保育科 布施 よし 井口 みれ 越村 しげ 水上 よし 鈴木 はる
竹中 しげ 十時 きく

○東京女子獨立女學校五人

加藤 りう 臼井 さな 加藤 しん 巳野 りき 臼井 まん

○東京立教女學校四人

檜山 しげ 小崎 さく 田中 やそ 田村 しげ

○横濱共立女學校六人

大山 たま 大谷 いれ 山家 きん 丸家 さん 岩間 たみ 米倉みつる

○横濱英和女學校五人

高等科 田中はつえ
普通科 田村 きた 鈴木 ひで 岡瀬 やへ 服部 かつ

○神戸女學院七人

高等科 中塚 いく 四宮 止 河島 芳
普通科 伊藤 國 リース、ドラ 井上 幸 松山 沖津 島

○仙臺宮城女學校三人

中山 たけ 石川きくよ 鈴木 さく

○函館北星女學校三人

古賀 はつ 三上 りえ 島田 きぬ

○靜岡女學校五人

英語科 野口 しま
邦語科 鈴木 たけ 乙黒 つれ 小山 つれ 飯島 きく
(未載の分は至急御通報ありたし)

塙保己一編纂
經濟雜誌社飜刻

羣書類從

全十九册

四六形洋裝美本
紙數二萬一千頁

本書は曩きに豫約を以て出版したる者にして殘部左の區別を以て分賣すべし請ふ購求あらんことを

部	種數	册數	價
神祇部及帝王部			賣切レ
補任部	二十七種	一册	金壹圓
系譜部	二十種	一册	金壹圓十錢
傳部	二十一種		
官職部	八種		
律令部	六種		
公事部	五十九種	一册	金壹圓六拾錢
裝束部	二十二種	一册	金壹圓七拾錢
文筆部	三十四種		
消息部	二十一種		
和歌部	四百十種	四册	金五圓四拾錢
連歌部	九種		
物語部	二十種	一册	金壹圓九拾錢
日記部	八種		
紀行部	三十九種		
管絃部	二十種	一册	金壹圓貳拾錢
蹴鞠部	八種		
鷹部	十種		
遊戲部	十七種		
飲食部	十三種		
合戰部	六十五種	二册	金壹圓八拾錢
武家部	七十七種	一册	金壹圓五拾錢
釋家部	七十九種	一册	金壹圓
雜部	百七十八種	三册	金五圓

明治廿九年七月

東京々橋區彌左衛門町七番地
電話千二百二十三番

合名會社 經濟雜誌社

自由黨々報

第百二十號　七月十二日發行

黨論○國務大臣○戰後の經營を完くせんと欲せは先づ財源を増殖せよ（櫻井勉）論說○進歩黨の潰兆（湖海眞人）雜錄○故植木枝盛氏無天雜錄抄（四）○歌三首（田中賢道）○放言七條（芙蓉隱士）黨報○我黨本部の集會○中國遊說員の進發○東北會○神戸政談演舌會○播州にだける河野氏一行○東京文部有志者○北陸七州遊說記（同行報告）○山陰遊說記（奥野氏報告）○海嘯視察日記（愛澤代議士報）世界○英國政府の失策○米國合衆黨の黨議○支那分割の成行○フィリッピン群島稅關の弊○獨逸最近進水の甲鐵艦時事○海嘯罹災地善後策○臺灣の匪賊○選人の自利主義○進歩黨の椽下○咄英人何を云ふや○陸軍々人休暇規程○時事日記

定價　一部金六錢十二部前金六十六錢　廿四部前金壹圓二十錢郵稅なし

東京芝公園　**自由黨々報局**

「ベビー」手みしん

「志ろうと」も直ちに使ふことを得べし。
音もせず、八釜しくなし。
机の上に置き、座りながら扱ふことを得べし。
形小さく、取扱ひ方至極容易なり。
直段尤とも廉なり。
右代價正金五圓也

日本及支那一手販賣店　横濱居留地五十番
エッチ、ゼーデビソン商店

東京代理店。麹町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

日本の家庭

第八號　七月一日發行

口繪 ●樹陰納涼の大圖
挿繪 ●大小十餘

●日本の家庭　槇岡蘆舟
○祖先と家庭
●談話
○福羽子爵の談話
●史傳
○ジョン、キットー
●教育
○種痘のこと○初子の躾方（鹿鳴）○小見の無邪氣（志保野）
●小說
○女房氣質（上田落葉）○紅一點（經營子）
●たのしみ
○いやなもの（劍花山人）○半日の旅（行樂生）○花卉の代表（鹿鳴）○盆踊歌
●衞生
○明礬の害○夏の養生○海水浴○燒傷の手當○蜘蛛に嚙まれたるときの心得○看護法（四）
●家事
○儉約と帳面○新しき稅法○いろは家訓○煙草の脂衣服に附たるには○衣類の黴を去る法○鵞鳥を飼ふの利○夏の花○だいどころ
●雜錄
○大凶變○西諺私釋（一）（眞山生）○逍田市五郎より故鄉の母姉に送れる手紙○丸山やい女○墓地に附て（中村生）○日本の家庭第七號口繪を見て○俳句其他數件

發行所　麹町區富士見町二丁目　**日本の家庭社**

切拔通信の要旨

●今全國の新聞紙無慮百數十種日々掲載する所の事項千差萬別世人の必す知らさるへからさるもの擧て數ふへからす然れとも全國の新聞紙を一集して盡く之を各自に通讀せんこと人事の繁多なる今日に在て容易に爲し得へきにあらす是本社か嘗て新聞切拔通信の業を創始し以て江湖必須の需めに應せんと欲する所以なり

●切拔通信をなすへき概目は農工商業政治法律外交貿易政黨倶樂部教育宗教歷史詩歌遊藝演劇土木建築鑛業山林美術技藝各人身上に關する事等凡て諸新聞紙上掲載の件は小説廣告に至るまて其委托に應し精閲遺漏なく勉めて迅速に遞送して以て受託者の便益を期す

東京市京橋區釆女町廿壹番地
東京通信社附屬
新聞切拔通信部

切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は壹ヶ月金貳拾錢とす●一事業又は一事物に止まる通信は壹ヶ月金參拾錢より金五十錢まて●一會社又は一團体の全般に關する通信は壹ヶ月金五十錢より金一圓まて●前記の事項と雖とも關係の範圍廣く日々の事件多數なるものは臨機の契約を爲すことあるへし●月數に拘はらす件數にて委托せらるゝものは東京は拾件に付金貳拾錢地方は郵税を併せ金參拾五錢とす尤も細項は總て錢外として件數に算入せす●本社切拔通信規則書御入用の方は御通知次第郵送すへし

大日本女學會 會員募集

總裁 小松宮御息所殿下

副總裁 鍋島侯爵夫人

本會は女子に必要なる學科手藝科を掲げたる講義錄を發行し女學校に登校し難き女子に配布して自修せしむ講義は何れも名家の擔任に係り講述の懇到平易なる編成の高尚優美なる能く學問と實用との調和を得て所謂花も實もある家庭の良師なりとは世上識者の定評也特に毎巻畏くも **皇后陛下叡覽**の光榮を荷ふ講習の期を二個年とし第八巻迄既刊す目下新版出來に付各巻欠本無し會費は束脩三拾錢月謝三拾錢とす詳細なる會則希望者へは申込次第進呈す可し本會賛成貴婦人方左の如し

有栖川宮御息所殿下

毛利公爵夫人細川大山前田松平淺野各侯爵夫人戸田大隈大谷土方各伯爵夫人仁禮戸田曾我山地秋元各子爵夫人岩崎（兩家）常盤井南部赤松各男爵夫人鳩山濱田穗積（兩博士）富井大澤加藤片山高木中澤中濱矢田部青山佐藤佐々木（兩博士）三宅宮下弘田各博士夫人濱尾新原六郎西周西紳六郎小野田元熙高木豐三辻新次長崎省吾瓜生外吉矢野文雄松平正直前田正名益田孝馬渡俊猷佐藤正清浦圭吾木內重四郎三井三郎助三井武之助諸君各夫人松平侯母堂大隈伯若夫人上野幾子君津田梅子君（次第不順）

東京市麹町區上手三番町二十八番地

大日本女學會

明治女學校基本金廣告

東京鐘ヶ淵紡績會社工女夜學校有志生徒二百二十六人の諸氏は弊校の志望に感激すとて金拾八圓五拾錢を贈らる、亦是れ其の賃銀の時蓄より成ると云ふ。則ち、岡山孤兒院の義捐と同じく本校基本金となし、永く其の非常の芳志を紀念す。

女學雜誌定價表

	定價	
一册	金拾錢	
一年前金	金壹圓	（無郵税）

明治廿七年一月十四日内務省許可
明治廿九年七月廿四日印刷
明治廿九年七月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麹町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麹町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

A COMMUNICATION.

In common I doubt not with your women readers everywhere, I have turned month by month with increasing interest to the Women's Department of the Japan Evangelist; and though its head, Mrs. Kashi Iwamoto, was known to me only through her English writings, I cannot but share the universal sorrow for her loss. Surely this universal feeling ought to find expression in some lasting monument; and the opportunity is before us in the need of funds to rebuild the Meiji Jo Gakko, that school so dear to her heart, and so sadly connected with her last illness. It has been suggested that a special fund should be raised either to erect or to furnish—according to the amount collected—some one building of the renewed school. Perhaps some readers of the Evangelist may help to gather this fund, in memory of one who indeed needs no monument, for "her works do follow her."

Subscriptions may be sent to the Business Agents of the Japan Evangelist, 15-A, Tsukiji, Tokyo.

Anna C. Hartshorne.

(It is sufficient for us to say that we take pleasure in heartily endorsing the proposal of the above letter. It is a call that comes to every one that sympathizes, with any sincere effort to elevate the womanhood of Japan. Editor of the Japan Evangelist).

檄告一則

妾はジヤパン、エバンゼリスト雜誌の婦人欄を愛讀して月毎に興味同情を加へたり。是れ諸し該雜誌の婦人讀者諸君が何處に於ても同感を表せらるる所ならん。此欄の主筆巖本かし子夫人さは未た一回の面識あらず、妾は只だ其の筆に成れる英文を通ふして之を知るのみなりしが、今や夫人を失へる公衆一般の悲痛に對しては切に同感禁ずる能はざる也。去れば此の一般の悲痛の感情は何ものか永續すべき碑銘に顯現せざれば止まざるべきを思はるゝ折柄、恰かも好し、夫人が心胸を此上なく親密にして而も其の最後の不幸さ痛ましくも相關係せる彼の明治女學校の再築資本の必要せらるる機會は、如今正に妾等が目前にあり。此に於てか注意する人のありて、亡き夫人を紀念せんが爲めに特別資本を募集し、其の集り高の多少に應じて再築校舍中の一室を建設し若くは裝飾せばやと思ひ立ちぬ。蓋し故巖本夫人の如きは、所云ゆる「遺業故人を追ふものにして」殊更に一の紀念碑を建つるの必要なきものながら、ジヤパン、エバンゼリストの讀者中には、確かに此の發企に賛成して資本募集の事に助力せらるるならんと信す。

寄附金は、東京築地十五番一號ジヤパン、エバンゼリスト事務掛に向け送附せられたし

アンナ、シー、ハーツホルン

（エバンゼリスト雜誌の編者附言す、吾等は最早多く言ふの必要なし只だ一言すれば足れり。右檄文の勸告なる所、熱心に協贊するは吾等が愉快とする所、蓋し之れ眞實に日本の女德を高めんとする人士が皆な耳を傾けて謹聽する所の聲なりとす。）

明治廿九年三月十五日遞信省認可

明治廿九年三月十五日遞信省認可

Aug. 1896
no. 425

明治二十九年

女學雜誌

八月刊行